

# 宮沢賢治の科学と農村活動

—農業をめぐる知識人の葛藤—

並 松 信 久

## 要 旨

宮沢賢治（1896–1933）は農村活動と信仰に根ざした創作活動を行ない、多くの詩や童話を残した。賢治を対象とする数多くの研究業績は、主に作品を通して芸術と宗教について語られている。それと同時に、賢治の履歴や活動から、農業実践や農村活動にも焦点が当てられている。農業に関心をもった知識人は数多くいるが、高等教育機関で農学を学び、農業を実践した知識人は賢治だけであった。しかし、賢治の作品と農業との関係は十分に解明されていない。

本稿は、賢治の作品を通して、賢治が当時の農業や農村をどのようにとらえたのかを考察した。賢治の作品は、自然科学の用語が多く使用されていた。さらに人間が主役となる小説は全く書かれていなかった。物語は自然を対象としたものが多く、そこで描かれる人間もまた動植物の装いを帯びていた。この点で賢治の作品には、農業が色濃く反映されていた。本稿では、著名な詩「雨ニモマケズ」の一節をめぐる解釈に基づいて、「農学の有効性」、「農村問題とその対策」、「農村社会での疎外感」の順に考察した。

賢治の農村活動はほとんど成果を残さなかった。活動はうまくいかなかったために、賢治の悩みや挫折は大きなものであった。しかし、それこそが賢治を創作や信仰へと駆り立てる原動力となった。言い換えると、科学技術に代表される近代性と、血縁や地縁に代表される伝統との葛藤が、賢治の作品を生み出す大きな要因となったといえる。

キーワード：宮沢賢治、農業、農学、農村社会、童話

## 1 はじめに

宮沢賢治（1896–1933、以下は賢治）は、大正期から昭和初期にかけて農村活動と信仰に根ざした創作活動を行ない、多くの文学作品を残した。しかし、37年という短い生涯であったこともあり、生前は賢治の名が一般に知られることはほとんどなかった。没後に詩人の草野心平（1903–1988、以下は草野）らを通じて知られるようになった。そして周知のように、今もなお詩人や童話作家としての活動やその作品に注目が集まっている。賢治を対象とする多くの研究業績は、主に作品を通して芸術と宗教について語られている<sup>1)</sup>。それと同時に、賢治の履歴や活動から、農業実践や農村活動にも焦点が当てられている。

賢治と同様、大正期・昭和初期に農業に関心を向け、農民への奉仕活動に従事した知識人は数多くいる。たとえば、内村鑑三（1861–1930）、武者小路実篤（1885–1976、以下は武者小路）らである<sup>2)</sup>。文学の執筆に広げれば、長塚節（1879–1915）、有島武郎（1878–1923、以下は有島）、

島木健作（1903-1945）らも含まれるであろう<sup>3)</sup>。しかしながら、これら多くの知識人のなかで、高等教育機関で農学を学び、農業の実践を行なったのは、賢治だけである（有島は札幌農学校出身であるが、卒業後は農学や農業とほとんど関係をもっていない）。農学の勉学と農業実践のいずれかを行なった知識人は、他にも数多くいるが、大正期・昭和初期で農学の学びと農業の実践を行なったのは賢治だけであるといえる。

したがって、賢治の数多くの文学作品と農業というテーマは、賢治研究の中で大きな位置を占めてきた。賢治が農業の実践や指導を行なったことは、多くの賢治研究が触れ、すでに論じ尽くされた感がある。その代表的な研究は、大島丈志『宮沢賢治の農業と文学—苛酷な大地イーハトーブの中で』（蒼丘書林、2013年）であり、賢治の文学と農業との関連を詳細に解明している。しかしこの大島氏自身も、「賢治作品と農村・農業という視座では、そのかかわりの深さに比例して十分に研究が重ねられているとは言い難く、まだ解明すべき問題が残されている」<sup>4)</sup>と指摘される。本稿は、この大島氏の問題意識の延長上に位置するものであるが、農学の適用や農業指導という点で、新たな知見を得たいと考えている。なぜなら、賢治の活躍した時期は、農業政策において米麦中心の増産政策を積極的に推進するようになり、国家政策としての特徴が色濃く出てきた時期であったからである<sup>5)</sup>。つまり、行政主導の農業と賢治の理想とする農業は異なっていたと考えられるからである。

ところで、賢治が1924（大正13）年に自費出版した詩集『春と修羅』は、生前ほとんど注目されなかったが、出版時に書評が二つ出された。一つは、ダダイズム詩人の辻潤（1884-1944）による書評で、『読売新聞』（1924年7月23日付・24日付）の文芸欄に掲載されたもので、好意的であった。もう一つは、詩人の佐藤惣之助（1890-1942、以下は佐藤）が『日本詩人』誌の1924年12月号に載せた一文であり、特異性をもっていると称えた。佐藤はその特異な点について、「それに『春と修羅』、この詩集はいちばん僕を驚かした。何故なら彼は詩壇に流布されてゐる一個の詩葉も所有してゐない。否、かつて文学書に現はれた一聯の語藻をも持つてはゐない。彼は気象学、鉱物学、植物学、地質学で詩を書いた。奇扉。冷徹、その類を見ない」<sup>6)</sup>と述べた。つまり、当時の文学界にはアピールしないであろう特異な点は、賢治の科学的な表現であるとした。つまり、詩集には人間の感情だけでなく、「自然（科学）」が大きく入り込んでいると強調した。

この佐藤の書評は、やや逆説的であるが、賢治がなぜ小説を書かなかったのかという疑問に通じている。周知のように、賢治は多くの詩と童話を残した。しかし、なぜか小説は執筆していない。賢治は文学の表現形式のなかで、小説が最も楽に書けるとみなしていたにもかかわらず、それを書かなかった。賢治の物語（主に詩や童話）には、描かれる人間もまた動植物の装いを帯びている。つまり、賢治は主役を人間に限ってしまう小説を拒否したのではないかと考えられる。賢治の作品は人間と自然によって組み立てられている。このことから、農学や農業が詩や童話の題材になるのは、いわば当然であったといえる（宗教も賢治の作品の重要な構成

要素であるが、本稿では直接的には触れない。

賢治の農業・農村活動がなぜ創作活動へ結びつき、作品という形をとったのかという点については、これまでの先行研究によって解明されている（先行研究はぼう大な数にのぼるので、ここでは省略する）。しかし、その逆は未だ不明な点が多い。つまり、詩や童話をはじめとして数多くの創作活動には、どのような農学が潜んでいるのか不明なのである。賢治の場合、それは机上の知識を作品に挿入したものではなく、農業の実践活動を通じて得られた知見に基づいている。この点が前述のように、農業に関心をもつ他の知識人との大きな違いであるが、賢治は実際の農業活動を通じて、単なる知識としての農学との違いを感じたはずである。先行研究において、賢治の農業活動の中で大きな位置を占め、作品への影響も大きい羅須地人協会の活動や「農民芸術概論綱要」に関する評価が定まっていなかったのは、この違いが明らかにされていないからではないかと考えられる<sup>7)</sup>。

机上の農学・農業政策（行政に代表される）と実際の農業（農家の意思）との違いは、上記の本稿の問題意識に通ずるが、これを端的に示しているのが、著名な詩「雨ニモマケズ」の解釈である。「雨ニモマケズ」のなかに「ヒドリノトキハナミダヲナガシ」という一節がある。この文字列に「デ」があるが、これは高村光太郎（1883-1956、以下は光太郎）によって、「ド」から訂正された部分である。光太郎によって訂正されて以来、それが定説となって、全集本や教科書などでも「ヒドリ」と表記されるようになった<sup>8)</sup>。訂正したのは、このくだりを標準語の「日照り」と読み下したためであった。「ヒドリ」は「ヒドリ」の間違いであろうという判断からであった。しかし、この一節の解釈をめぐる、異論が唱えられている<sup>9)</sup>。

一つは、賢治の弟子のひとりであった照井謹二郎（1906-2002、以下は照井）の説で、「ヒドリ」は「日取り」「手間稼ぎ」の意味で、冷害や飢饉のとき農民は出稼ぎの手間賃仕事に出なければならなかった。つまり、劣悪な条件下での臨時仕事のことであったという。詩人の和田文雄（1928-、以下は和田）は、この解釈を当時の東北農村の実態を背景に、詳細な分析を通して明らかにした<sup>10)</sup>。二つは、小倉豊文（1899-1996、広島大学教授、以下は小倉）が唱えた「ヒドリ」は「ヒトリ」（一人）の誤記であるという解釈である<sup>11)</sup>。「雨ニモマケズ」が記された賢治の「最後の手帳」を詳細に調べ、この説を唱えた。これらの説は、それぞれ一理あるが、いみじくも賢治が直面した問題を示唆している。すなわち、「光太郎の日照り」は農学の有効性、「照井と和田の日取り」は農村問題、「小倉の一人」は農村社会での疎外感である。以下では、この順に賢治の学んだ農学の特徴、農村問題と賢治の考えた対応策、そして最後に賢治の感じた疎外感を考えていくことにする。

本論に入る前に、賢治の経歴を振り返っておく。賢治は1896（明治29）年に宮沢政次郎の長男として花巻に生まれ、1909（明治42）年に岩手県立盛岡中学校（現・盛岡第一高等学校）に入学する。1915（大正4）年に盛岡高等農林学校（現・岩手大学農学部、以下は盛岡高農）に入学し、農学科第二部（後に農芸化学科）に所属し、土壌学を専門とする関豊太郎（1868-

1955, 以下は関)の指導を受ける。入学前から鉱物採集が好きで、土壌学の専攻を選んだのも、その影響であるとされる。1918(大正7)年に盛岡高農を卒業後、研究生として残り、稗貫郡の土性調査にあっている。同年、肋膜炎の診断を受けるが、土性調査を9月まで続け報告書を提出している。

1918(大正7)年12月に妹トシの看病のため上京し、その後、1920(大正9)年3月に退院したトシとともに帰郷するまで、東京で生活をする。その後、家業を手伝うことになるが、その間に国柱会に入信し、法華信仰を強める。1921(大正10)年1月に国柱会や法華経への思いを募らせ、家出をして上京する。同年8月に妹トシ病気の電報を受け取り花巻に戻り、12月に稗貫郡立稗貫農学校(翌年、岩手県立花巻農学校に改称)の教諭となる。1922(大正11)年11月に妹トシが死去する。1924(大正13)年4月に『心象スケッチ 春と修羅』を自費出版し、同年12月に『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』を刊行するが、いずれもほとんど売れなかった。その後、1926(大正15)年3月に花巻農学校を退職し、4月から蔬菜と花卉の栽培を始め、「羅須地人協会」と称して農学校の卒業生や近在の農民を集め、農業や肥料の講習、レコード鑑賞や音楽楽団の練習を始める。6月に「農民芸術概論綱要」を起稿し、農民芸術の実践を試みる。そのかわり肥料設計事務所を開設し、肥料設計の相談にのっている。

1928(昭和3)年8月に肺湿潤で倒れ、以後、実家で病臥生活を送る。1930(昭和5)年に体調が回復に向かい、同年5月に東北砕石工場主が来訪し、石灰岩とカリ肥料を加えた安価な合成肥料の販売計画を説明し、賢治はそれに賛同する。その結果、翌年2月に東北砕石工場花巻出張所が開設され、賢治は製造から販売まで担当して東奔西走する。9月に重量のある製品見本をもって上京し、そのために高熱で倒れる。花巻に戻るが、病臥生活となり、11月に手帳に「雨ニモマケズ」を書く。1932(昭和7)年3月に「グスコブドリの伝記」を発表する。1933(昭和8)年9月に肥料設計の相談にのった後、逝去する。

本稿の引用文中には、不適切な表現が含まれている部分があるが、史実であることを重視して、あえて訂正を加えていない。また、引用文中には読みやすくするために、句読点を一部加えた箇所がある。人物の生没年については、可能な限り記した。

## 2 農業と科学

賢治の生家は、岩手県花巻の商家であり、古くから質屋と古着商を営んでいた。当時の農村地域でよくみられた典型的な高利貸資本であり、同時に自らは農作業に関わらない小作米をとるだけの寄生地主であった。1915(大正4)年の調査によれば、賢治の生家は、水田5町7反、畑地4町4反、宅地2,820坪、山林原野10町を所有していた。当時、田畑合わせて約10町歩というのは、中層の地主であったといえる。ちなみに、賢治の母親の実家は、田101町7反、畑28町1反、宅地12,104坪、山林原野160町を所有していた大地主であった<sup>12)</sup>。

賢治は生家が質屋と古着商であることを嫌悪していた。盛岡高農を卒業した後、賢治はしばらく家業を手伝わざるをえなかったが、まったく身が入らなかったことは、よく知られている。家業はやがて質屋を廃業して金物屋に転業したものの、賢治は生涯を通して、商人を嫌悪していた<sup>13)</sup>。商人に対する嫌悪は相当なもので、後年の母木光宛書簡においても、自分の置かれた経済的な背景について、

何分にも私はこの郷里では財ばつと云はれるもの、社会的被告のつながりにはひびつてゐるので、目立ったことがあるといつても反感の方が多く、じつにいやなのです。じつにいやな目にたくさんあって来てゐるのです。財ばつに属してさっぱり財でないくらゐたまらないことは今日ありません<sup>14)</sup>。

と記している。地方では財閥といわれるものの、社会的被告に属しているという。賢治は生家を社会的被告と言い、何か行動を起こすたびに社会の反発が強いと感じていた。

詩人（日本近代文学館名誉館長）の中村稔（1927-、以下は中村）は次のように指摘する。『なめとこ山の熊』を見るがいい、『カイロ団長』を考えるがいい。生産者を必ず収奪するものとしてあらわれる商人に対するかれの憎悪ははるかに烈しく、宮沢家の財産に対するかれの劣等感はいっそう強かったのではないか。ともあれ、宮沢家の一員であることが、かれを農民に奉仕させるべく義務づけた<sup>15)</sup>と語る。賢治は宮沢家が今日あるのは農民のおかげであるから、農民に何とか報いなければならないと考えていたようである。こうして農民に対する原罪意識とでもいうべきものをもち、昭和初期に農業・農村活動に従事することになる。

しかし、賢治の原罪意識は、原罪が商人であることに関わるものであって、寄生地主であることにはほとんど関わっていない。賢治の農村問題には、なぜか寄生地主制の問題が含まれていない。これについて、中村があげる三つの理由を参考に考えると、第一は、当時の小作問題については、科学によって生産力を高めれば解決できると考えていたこと。第二は、寄生地主はともかく、在村地主は不安定であり、没落するという事実を過大評価していたこと。実際に在村地主の場合は、安定的な立場が保障されていたわけではなかった。第三は、宗教的資質によって人間関係の対立は無意味であると感じていたこと、であると考えられる<sup>16)</sup>。つまり、賢治には小作問題に対する問いかけは少ないのかもしれないが、それはあくまでも寄生地主との関係であって、在村地主を含んでいたわけではない。しかしながら不可解なことは、賢治の作品のなかに小作問題に関連することが入っていないことである（賢治は文芸批評とともに社会批評とよばれるような論考は一篇も発表していない）。

地主制の問題も含めて、賢治は社会主義や労農党の同情者であるという指摘がある<sup>17)</sup>。確かに賢治が当時の労農党稗貫支部に金銭的な支援をしたことはあるが、これによって地主制に対する原罪意識が免罪となるわけではなかった。当時の岩手県は日本農業の後進地であるとも

に、農民運動もまた大きく立ち遅れていた。小作争議も少なく、東北地方で1935（昭和10）年時点でも全国組織の農民組合の支部がないのは、岩手県のみという状態であった。これは地主・小作問題が生じていなかったからというわけではなく、地主の力が非常に強かったことを物語っている<sup>18)</sup>。賢治の生家の質屋に通ってくるのは、このような力関係の中にある小作農がほとんどであった。賢治は小作農と接して、上記の社会的被告という意識が芽生えたものの、それを解消するには社会変革ではなく、科学の力が大きいと信じていたようである。

賢治が科学を身に付けたのは盛岡高農時代であったが、賢治が最も大きな影響を受けた著書があった。それは片山正夫『化学本論』（訂正第二版、内田老鶴圃、1916年）である。賢治はこの著書によって化学を知っただけでなく、光の特性、量子力学、原子論などに関心をもつようになった。賢治が後に身に付ける高度な科学知識の基礎になったものであり、数多くの作品のなかで使われた科学用語（とくに化学用語が多い）は、この著書に多くを負っていた<sup>19)</sup>。盛岡の下宿で同室した弟の清六は、「当時の賢治が、片山正夫著『化学本論』と島地大等訳『漢和対照妙法蓮華経』を座右からはなさず、その裏表紙に毛筆で、「著者に感謝す」という意味のことばを書きこんでいた<sup>20)</sup>と伝えている。

研究については、関教授（盛岡高農在職は1905～1920年）の下で土壌肥科学を学び、さらに冷害に関する知識も深めた。関教授は主に火山灰土壌の研究者であり、火山灰土壌の分類体系を行ない、それが畑地不良土改良の理論的基礎となった。もっとも、関の盛岡高農における最初の研究は、冷害に関わる凶冷気象やその予知問題であり、初めて潮流との関係で「ヤマセ」（主に東北地方の太平洋側で春から夏にかけて吹く冷たく湿った北東の風のことであり、水稻を中心に農産物の生育に大きな影響を与える）の現象を明らかにし、海水温や漁況から凶冷予知の可能性に触れた画期的な研究を行なった。この冷害の研究も、賢治の作品に影響を与えている。

関教授の土壌研究の指導で、賢治の得業（卒業）論文は「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」<sup>21)</sup>であった。この論文で対象となった土壌は、腐植に富む岩手山麓と稗貫郡の黒ボク土であり、可給態カリが少なく、やせた生産力の低い土壌であった。これを肥沃な土壌に変えるにはリン酸が必要であったが、リン酸は不可給態であるので、これを可給態に変えるには焼土法が最良の方法であるというのが、論文の結論であった<sup>22)</sup>。この影響で、賢治の詩や童話には「(黒い)土」「腐植土」という言葉が数多くみられ、岩手山麓や北上山地などの地域（火山灰で覆われた腐植質黒ボク土が分布）を扱った作品が多い。

盛岡高農の卒業にあたって、関教授は賢治に研究生として残るように勧めた。しかし、賢治は調査自体の意義について否定的にみていた。父親宛の書簡で、

研究科には残り候とも、土性の調査のみにては将来実業に入る為には殆んど仕方なく、農場、開墾等ならば兎に角、差当り化学工業的方面に向ふには全く別方面の事に有之候（中

略) 仮令研究生として残るにても膠状化学, 有機化学等ならば兎も角, 全体土性調査のみにては研究とは名のみにて単に分析及調査に過ぎ申さず候<sup>23)</sup>。

と記して, 調査と研究とは別であると考えていたようである。さらに, 研究生として残った後でも,

甚自分勝手なる様に御座候へども, 実は土壤の化学分析なるものは形式的のものにて大したる効果無之ものなる為, 私には全く無駄仕事の様に思はれ候次第に御座候<sup>24)</sup>。

と記して, 調査は無駄とさえ考えていたようであった。しかし, 土壤や地質に関する理解は, 調査経験を通して進んだようであり, 土壤や肥料は, 賢治が生涯を通して取り組んだテーマとなった。結局, この時点で賢治が不満を抱いたのは, 調査というものが自分の創意工夫があまり生かされないという点であった。これは賢治自身の創作意欲につながらないということに関連していた。

1918 (大正7)年に盛岡高農に研究生として残った賢治は, 稗貫郡の地質・土性調査に取り組んだ。その調査結果は関教授によって「岩手県稗貫郡地質及土性調査報告書」としてまとめられた。この時の知見は, 後に羅須地人協会での稲作施肥計算に生かされた。当時, 「それでは計算いたしませう」という詩を書いているが, その一節に,

土はどういふふうですか／くろぼくのある砂がゝり／(中略)／けれども砂といたって／指でかうしてサラサラするほどでもないでせう／掘り返すとき崖下の田と／どっちの方が楽ですか／上をあるくとはねあげるやうな気がしますか／水を二寸も掛けておいて, あとをとめても／半日ぐらゐはもちますか／(中略)／磷酸を使ったことがありますか<sup>25)</sup>。

この詩は黒ボク不良土であるか, 肥沃な沖積土であるかを判定するために, 農民に質問をした体裁をとっている。賢治がこだわったのは, 腐植の集積した黒土(黒ボク土)であり, この詩はそれを改善しようという強い意思を表明したものであった。

その後, 1921 (大正10)年12月から約4年間にわたって岩手県立花巻農学校(当初は稗貫郡立稗貫農学校)の教師を勤める。そこで農業教育にあたったが, それ以外にも多くの科目, たとえば, 代数・農産製造・作物・化学・英語・土壤・肥料・気象などを教え, 水田稲作の実習も受けもった。授業では教科書をあまり使わず, 要点は時間を割いてわかりやすい言葉で説明した。生徒が授業に飽きてくると, 自作の童話を語って聞かせたりした<sup>26)</sup>。教師の賢治について, 生徒のひとり次のように回想している。「先生はわたしたちにいつもいってました。学校を出たら家へ帰って百姓をやれ。なんどもなんどもいわれたのです。ところが学校を出る

と、たいてい技手になったり役所へつとめてしまう。それでも農村は立ち直れない、よくならないと先生は思われていたのです。そういう自分が俸給生活者である矛盾から、おれも百姓になるから、おまえたちもなってくれ、という強い態度を示されたのだと思います」<sup>27)</sup>と語っている。賢治は経済的に保証されている教師が、生徒に向かって農業を継ぐように促すという矛盾を感じていた。その後、賢治はこの矛盾を振り払うかのように、教師を辞めて農業実践に飛び込むことになる。

賢治の土壌に関する問題意識は、農学校時代も続いた。1924（大正13）年の北海道「修学旅行復命書」のなかで、北海道石灰会社が石灰岩抹を販売しているのをみて、石灰岩抹が「酸性土壌地改良唯一の物なり。米国之を用ふる既に年あり。内地未だ之を製せず。早くかの北上山地の一角を砕き来りて、我が荒涼たる洪積不良土に施与し、草地に自らなるクローバーとチモシイの波を作り、耕地に油々漸々たる禾穀を成ぜん」<sup>28)</sup>として、土壌改良に対する抱負を記している。賢治は後の1931（昭和6）年に、石灰岩抹の製造販売に関わる東北砕石工場の技師となるが、この時の問題意識が続いていたことを物語っている。技師となる際にも、関に書簡を送り、砕石工場の囑託を引き受けてよいかを相談し、工場の状況を報告し、石灰岩粉碎の粒度などに関する教えを乞うている<sup>29)</sup>。関もこれに応じて書簡を出し、後日（1934年）、このことを感慨深く記している<sup>30)</sup>。

賢治は1925（大正14）年6月に友人に宛てた書簡で、「来春はわたくしも教師をやめて本当の百姓になって働らきます」<sup>31)</sup>と記しているように、1926（大正15）年4月に花巻農学校を依願退職した。そして下根子桜の宮沢家の別宅で、花壇づくりや開墾を行ない、同年の夏頃に「羅須地人協会」を開設する<sup>32)</sup>。賢治はそこで自ら農業を営みながら、無料の肥料相談や農事講演を行なった。いわゆる農村活動であり、農民への奉仕活動であった。羅須地人協会の入会資格は農業に関わっていることであり、入会金も会費も無料であった。約20名の青年が参加したが、その大半が農学校の教え子と、岩手国民高等学校の連続講義（1926年1～3月に行なわれた6回の講義で、その題目一覧が「農民芸術概論」<sup>33)</sup>であった）の聴講生であった。当初は、青年たちと議論をし、小さなオーケストラを組織して、実際の農業とはほとんど関わりをもたなかった。

しかし、賢治の農業実践への意志は固く、農業の実践へと移る決意が、以下の詩「〔生徒諸君に寄せる〕」に詠われている。

〔断章六〕 新らしい時代のコペルニクスよ／余りに重苦しい重力の法則から／この銀河系  
 統を解き放て／新らしい時代のダーウキンよ／更に東洋風静観のキャレンチャーに載って  
 ／銀河系空間の外にも至って／更にも透明に深く正しい地史と／増訂された生物学をわれ  
 らに示せ／衝動のやうにさへ行はれる／すべての農業労働を／冷く透明な解〔析〕によっ  
 て／その藍いろの影といっしょに／舞踏の範囲に高めよ／素質ある諸君はたゞにこれらを

刻み出すべきである／おほよそ統計に従はゞ／諸君のなかには少くとも百人の天才がなければならぬ。

〔断章七〕 新たな詩人よ／嵐から雲から光から／新たな透明なエネルギーを得て／人と地球にとるべき形を暗示せよ／新たな時代のマルクスよ／これらの盲目な衝動から動く世界を／素晴らしく美しい構成に変へよ／諸君はこの颯爽たる／諸君の未来圏から吹いて来る／透明な清潔な風を感じないのか。

〔断章八〕 今日の歴史や地史の資料からのみ論ずるならば／われらの祖先乃至はわれらに至るまで／すべての信仰や徳性はたゞ誤解から生じたときへ見え／しかも科学はいまだに暗く／われらに自殺と自棄のみをしか保証せぬ／誰が誰よりどうだとか／誰の仕事がどうしたとか／そんなことを云ってあるひまがあるのか／さあわれわれは一つになって（以下空白）<sup>34)</sup>。

この詩には、農学校の教員であった賢治が強調する、生徒に対する帰農への想い、農業労働ないし農業実践のあるべき理想的な姿が描かれている。賢治が農村活動に入ったのは、言行一致をめざしたからに他ならない。すなわち、自ら教えた農学校の生徒に農業に従事することを説いた以上、自らも農業をしなくてはならないと考えたのである。

賢治の関心が農業や農村に向けた要因は、唯一の理解者であった妹トシの死、農学校生徒との接触、学校という制度の疑問などが絡み合っていた。賢治が農民を本当に肌で知り始めたのは、盛岡高農時代ではなく、農学校教師として生徒と接触した時からであった。教師として友人として生徒の内面に深く感入していったとき、はじめて農村の貧困や疲弊が人間にとって何を意味するのかがわかった。精神医学の福島章（1936-）によれば、「農村問題」が賢治を動かしたのではない。矛盾と問題を抱えた農民が、賢治と同じように人の形をそなえた創造物にとって、いかに許しがたい状態にあるかということ、賢治は自らの肌の痛みとして感じたからであるという<sup>35)</sup>。またそうであったからこそ、賢治は農学校教師を辞職して、安穩で愉快的な生活を捨てようとしたのであった。

羅須地人協会で賢治に師事した千葉恭（1906-1989）によれば、賢治が語った羅須地人協会の設立目的は、次のようなことであった。「医者には病人を診断して薬を与えるが、病人はその細部はわからない。同じように農民は稲作の細部はわからないから、自分たちが土地設計（肥料設計）をして指導していかなければならない。気候・土質・肥料がいちばん大切だが、これは農芸化学でいちばん面倒で、現在の百姓は知らないし、知ろうともしない。これを知らしめることが必要だ」<sup>36)</sup>という考えがあったという。しかしながら、賢治は農民に肥料設計の細部を説明したわけではなかった。農民への問診に基づいて、それに既存の形式をあてはめて設計図を描くだけであった。多くの医者と同じように、症状に応じて処方箋を書き、患者はそれを信用するだけで良いという方法であった。賢治には近代農学に対する信仰のようなものがあっ

た。肥料相談に訪れた農民は、自作中農ないし小作農であり、中堅以上の自作農や地主はいなかった<sup>37)</sup>。どちらかという、技術水準の低い農民を相手にした。しかし、農民を対象にする技術指導は、賢治にはそれまでの農業経験がなく、それを生かすことができなかつたので、科学技術への信頼に基づかざるをえなかつた。科学への信頼は絶大なものであり、「信仰」に近いものであった。賢治は盛岡高農で学んだ農学ないし土壌肥料学が、農民の在来的な技術を上回るという信念なしには、責任ある肥料設計はできないと考えていた。

羅須地人協会では、賢治自身も、また集まった農村青年にも粗食を課し、農業以外に文化活動を行なった。賢治は求められれば、無数の肥料設計（作物が必要とする肥料を適切に施す方法を組み立てる）をこなし、その結果についても責任を負った。その状況は、次のような詩になっている。

もうはたらくな／レーキを投げろ／この半月の曇天と／今朝のはげしい雷雨のために／おれが肥料を設計し／責任のあるみんなの稲が／次から次と倒れたのだ／働くことの卑怯なときが／工場ばかりにあるのではない／ことにむちゃくちゃはたらいて／不安をまぎらかさうとする／卑しいことだ／（中略）／さあ一ぺん帰って／測候所へ電話をかけ／すっかりぬれる支度をし／頭を堅く縛って出て／青ざめてこはぼったたくさんの顔に／一人づつぶっつかつて／火のついたやうにはげまして行け／どんな手段を用いても／弁償すると答へてあるけ<sup>38)</sup>。

と記している。この詩から、結果に対する責任という賢治が置かれた過酷な状況とそれへの対応がうかがえる。

賢治の献身と誠実さを、だれも疑わなかつた。しかしながら、たとえ賢治の農事指導がうまくいって1～2割の増収がもたらされ、それが小作農の増収になったとしても、収穫量の5割に達する小作料が、大きな障害となって立ちはだかつた。つまり、増収がもたらされても、小作農にとって増収分は半減してしまう。しかし賢治は小作料の割合を問題にすることなく、ひたすら総量の増加、反収の増加に向かった。これに関して、中村は土地生産力主義を批判し、労働生産力を追求すべきであったと述べているが、地主制の制約のもとで、零細経営がとるべき方向性としては、土地生産性と労働生産性を同時に追求しなければならなかつたはずである<sup>39)</sup>。

反収増については、当時の農業政策の基本方針であり、農業指導の根本でもあつた<sup>40)</sup>。当時は県農会も技師を置いて農業指導を行なつていた。この点では賢治のそれと大差なかつた。賢治は県の農事試験場と連絡をとつていたが、試験場の技師からみても、賢治の肥料設計に特異性や独自性はなかつた<sup>41)</sup>。しかし、農会の肥料設計に比して、賢治のそれは多肥多収を指向するものであり、化学肥料が多いという特徴をもつていた<sup>42)</sup>。当時の農会の技師は、賢治の大胆

さに驚嘆すると同時に、危惧の念も抱いたようである<sup>43)</sup>。肥料設計は技術の知見だけで可能であったが、賢治は稗貫郡の土性調査の経験はあったものの、決して経験豊かな技術者とはいえなかったからである。

多肥多収へのこだわりから、賢治は稲の品種である「陸羽132号」を奨励した。1927（昭和2）年7月10日の日付の入った詩「あすこの田はねえ」（『春と修羅』第三集）では、

君が自分でかんがへた／あの田もすっかり見て来たよ／陸羽一三二号のはうね／あれはず  
るぶん上手に行った／肥えも少しもむらがないし／いかにも強く育ってゐる／硫酸だっ  
てきみがじぶんで播いたらう／みんながいろいろ云ふだらうが／あちは少しも心配がない  
／反当三石二斗なら／もうきまると云っていゝ／しっかりやるんだよ<sup>44)</sup>。

として、農学校を卒業後に農業に従事した青年を激励している。この他にも「塩水撰・浸種」（『春と修羅』第二集）という詩においても、陸羽132号が登場する<sup>45)</sup>。賢治は陸羽132号を熱心に農民に勧めた。この品種は耐冷性に優れていたもので、農業政策においても奨励された。陸羽132号は1921（大正10）年に国立農事試験場陸羽支場で育成され、日本における近代育種学の最初の成果であった品種であり、耐冷性ととも、食味も良いので市場性の高い品種であった。この品種は昭和初期には目新しいものであったが、1935（昭和10）年頃には東北地方全体（とくに秋田県と岩手県）に広がった。

しかし、陸羽132号は多肥性の品種であり、多くの購入肥料、いわゆる金肥の投入が必要であった。したがって陸羽132号の導入にあたって、金肥の必要性は農家に大きな負担を強いた。そして肥料購入は弥が上にも農家を商品経済に巻き込んだ。しかし農家は肥料商から金肥を購入し、それを投入した結果、たとえ豊作になったとしても、豊作によって米価下落が生じ「豊作貧乏」に陥った。このため肥料購入費が負債となり、小作農がより一層困窮するという事態をもたらした。陸羽132号の出現は、収穫高の増加をもたらす一方で、農家を困窮させる一因ともなった。賢治は農業技術面では先駆的な活動を行なったものの、その背景にある農家経済という面には思い至らなかった。しかしながら、これが賢治の限界というわけではない。当時は日本全体が食料増産という唯一の目的に向っていたので、豊作貧乏のメカニズムなど眼中になかったからである。

賢治の説明は全体的に学問的な面では難しいものであったが、少なくとも実際の対処法については具体性があった。賢治の近代農学に対する姿勢については、次のようなことがいわれている。「科学人として人間力の最大限をつきとめねば承知できなかった宮沢さんは、あれ程、農業指導の上では実際家であったけれど、その仕事と作品は農業の面に限らず、むしろ農業と農民の道を、科学の力を全体的にこの世に実現することに依って解明し得る一分野と見る程も汎く高かった」<sup>46)</sup>とされているように、賢治は農業に対する科学信仰というべきものを持ち、

農学の適用に熱心であった。さらに「羅須地人協会の農民講座では、農業に必須な科学と化学の基礎知識を説いたが、ふつうはできるだけ具体的に、実地に即した教え方をしたものだ。古老の経験談をきき、科学的なうらづけをし、子どもにもわかるようにくわいてはなした。相手しだいで自在にそれをやった」<sup>47)</sup>とも評され、技術については、具体性をもたせ丁寧な態度で臨んだようである。賢治は高額な小作料は反収増で解決できると信じていただけでなく、科学こそが農業・農民問題を解決できると信じていた。

賢治の科学信仰は、岩手県の農業に大きな被害をもたらした「冷害」に対する姿勢にもあらわれている。当時、冷害は予測ができたとしても、克服ができない自然災害であった。この状況は基本的に現在も変わっていない。当時の農家は被害を最小限にするために、経験によって品種選択や水管理を行っていたが、被害の軽減は困難であった。賢治は冷害克服のために、当時、考えられる理想的な科学としてアレニウスの学説（『石灰問題—土壌反応と植物の生育』1926年刊）に基づいて、童話「グスコブドリの伝記」において、火山の爆発による気温の上昇という冷害の克服策を描いた<sup>48)</sup>。この作品は、周期的に発生する冷害と、冷害によって飢饉に見舞われる農村において、冷害が主人公一家の離散の原因となり、最後には主人公の死の直接的な要因ともなったことを描いている。冷害は周期性があるので予測はできたものの、防ぐことは困難であったために、農家にとって恐怖の対象となり、「グスコブドリの伝記」のなかでも「恐ろしい寒い季節」「烈しい寒さ」と表現されている。作品の中で描かれる主人公ブドリの死は、ひとりの英雄の自己犠牲的な死ではなく、冷害に恐怖する農家に共感する技師としての「でき得る限りの自然科学的操作」であったといえる<sup>49)</sup>。1932（昭和7）年4月に刊行された雑誌『児童文学』（第2号）で発表された「グスコブドリの伝記」は、賢治の自らありたいと願う生涯を描いたものといわれている。

「グスコブドリの伝記」を概略すると、

ブドリとネリの兄妹は父母の下で幸せに暮らしている。しかしある年、飢饉が襲って、両親は子供たちの食料を残して、森に入って餓死する。ブドリは妹とも別れ、辛酸を経て、イーハトーブ火山局の技師となる。そしてクーポー大博士を手伝って、サンムトリ火山の爆発を制御して人びとを救う。また火山局は窒素肥料を降らせることにも成功する。しかしある年、両親を餓死させた飢饉を起こす気象に見舞われそうになる。それを防ぐには、カルボナード島の火山を爆発させて、大量の炭酸ガスを放出させ、気候を変えるという手段があった。しかしそのためには、最後の一人が島に残って犠牲にならなければならない。ブドリはその一人を志願する。爆発は成功し、飢饉は回避され、人びとは救われる<sup>50)</sup>。

という物語であった。自らを犠牲にして農民を救うというのは、賢治に相応しいものといえる。しかしながら、この物語は一般に理解されているように、美しい自己犠牲の物語としか解釈で

きないというわけではない。ブドリは確かに犠牲的な精神を発揮したが、農民を救ったのはブドリの自己犠牲だけでなく、火山の爆発を制御し気候を変えることができた科学技術であった。ブドリは忠実に科学技術に従っただけであり、その犠牲は科学という神に捧げられた「いけにえ」ともいえる。この物語において、賢治には科学技術に対する深い信頼のあったことがわかる。

しかし、科学技術の適用にあたって、時には誤りも起こる。「グスコブドリの伝記」のなかで、ブドリが小さな村の店で昼飯用のパンを買おうとして、意地悪く断られ、しかも近くの農民に袋叩きにあう場面がある。これは火山局の降らした肥料のために稲作が失敗し、それに怒った農民に、火山局のブドリが襲われたという設定である。しかし物語では、のちに肥料の施用を誤って教えた農業技師が、その失敗を火山局のせいにしたためであるとわかり、ブドリの疑いは晴れる。このパンを昼食にしようとして、店の主人に意地悪くされる情景は、改めて「境内」<sup>51)</sup>という詩のなかで、賢治自身の体験として出てくる(後述)。

ところで、羅須地人協会などで農業実践を始めた賢治は、その理論として「農民芸術」論を作成する。この農民芸術論は具体的には三つの文章から成っていた。すなわち、「農民芸術概論」「農民芸術の興隆」「農民芸術概論綱要」である。これらの執筆時期は1926(大正15)年1月から同年6月頃であるとされる。1月が岩手国民高等学校で「農民芸術」を講義した時期であり、6月は羅須地人協会の活動を開始した時期である。一つ目の「農民芸術概論」は、将来、農村の中堅となる青年育成のための岩手国民高等学校での講義に使用された題目および副題を記したプログラムであった。二つ目の「農民芸術の興隆」は、「農民芸術概論」と「農民芸術概論綱要」の両方に題目として記載されている内容をメモ書きの形で解説したものであった。三つ目の「農民芸術概論綱要」は、岩手国民高等学校での講義「農民芸術」の内容が6月までの半年間で推敲されたものであった。

賢治の農民芸術を生み出す背景となったのは、科学・宗教・自然が分割不可能な三位一体となったものであるという考え方であった。これは、いうまでもなく、農業実践と密接に結びついていた。農民は自然と密なる関係を結んで生長し、自らの直観力の純粹性を都会人のように、とりわけ都市の知識人のように損なわれることはない。賢治は、都市知識人は理屈をこねまわすに急なあまり、直観力を失っていると考えていた<sup>52)</sup>。とくに「農民芸術概論綱要」のなかで、当時の芸術家(暗に文学者)を指して四つの点で批判した。一つは、東京での群生のため、自然から疎遠になった。二つは、自己のために生きるのみであって、何ら社会的役割を果たさなかった。三つは、大きな基盤に立つ宗教的世界観を否定し、芸術的優劣を競う偏狭な文芸理論のほうを好んでいた。四つは、従来の創作者としての役割を拡張して、一国の文化の監視者となってしまった、という点であった<sup>53)</sup>。

賢治が農民芸術という場合、とくに農業労働という点で、その結びつきを強調した。賢治の「講演筆記帖」によれば、労働を楽しくする方法として「機械的な労働を創造に込めて戻す」こ

とや「各自の能力が何処までも発展出来る」ことを強調し、主体性をもたない機械的な労働から脱却し、目的をもった創造的な労働による各自の能力の成長を重視した。しかしこの創造的な労働は、農業労働に限定されたものではない。「総べからく半農半商で行くより外あるまい、／半農半工で行き組合、物々交換で行くより仕方がない、／故に出稼をして都会の工業を盗み来て自要品を製造するのである、／農村の利害は先づ見づ<sup>54)</sup> 団結すべきである、／大量生産である」<sup>54)</sup>としていた。賢治は機械的な労働を否定し、自給自足（物々交換）とともに農業・工業・商業を融合させるような労働を勧める。これは工業の利用や都市との交流なども含めたものである。この点で「農民芸術」は、作品の上では「ポラーノの広場」<sup>55)</sup>における産業組合による地域の産業づくりの構想、「グスコブドリの伝記」における化学の農業利用と商品作物の大量生産の試み、そしてブドリの技術者としての生きざまへと受け継がれていった。

1927（昭和2）年1月31日の『岩手日報』紙上に、羅須地人協会は「農村文化の創造に努む／花巻の青年有志が／地人協会を組織し／自然生活に立返る」と載ったことによって、危険思想と疑われて取り調べを受け、その年の3月に羅須地人協会の活動は終焉をむかえる。しかしその後も、賢治は1928（昭和3）年3月頃まで、無料の肥料設計や農事相談などの技術指導を続けた。

### 3 農村問題と商品経済

賢治の理想社会は、工業を含む自給自足的な農村社会であった<sup>56)</sup>。当時、理想社会を築こうとした試みでは、武者小路の「新しき村」や有島の農場解放などが著名であった。しかし賢治は「新しき村」や農場解放に関心を示した形跡はない。賢治は白樺派の理想社会への試みには関心がなかったようであり、それらが実態に即していないと思っていたのかもしれない。しかし、賢治による理想社会の構築という点で大きな障害となったのは、前述のように地主・小作問題であった。

賢治の作品のなかで、次のような「地主」という詩がある。

水もごろごろ鳴れば／鳥が幾むれも幾むれも／まばゆい東の雲やけむりにうかんで／小松の野はらを過ぎるとき／ひとは瑪瑙のやうに／酒にうるんだ赤い眼をして／がまのはむばきをはき／古いスナイドルを斜めにしよって／胸高く腕を組み／怨霊のやうにひとりさまよふ／この山ぎはの狭い部落で／三町歩の田をもつてゐるばかりに／殿さまのやうにみんなにおもはれ／じぶんでも首まで借金につかりながら／やっぱりんとした地主気取り（中略）そんな桃いろの春のなかで／ふかぶかとうなじを垂れて／ひとはさびしく行き感ふ／一ぺん入った小作米は／もう全くたべるものがないからと／かはるがはるみんなに泣きつかれ／秋までにはみんな借りられてしまふので／それならおれは男らしく／じぶんの

腕で食ってみせると／古いスナイドルをかつぎだして／首尾よく熊をとってくれば／山の神様を殺したから／ことしはお蔭で作も悪いと云はれる／その苗代はいま朝ごとに緑金を増し／畔では羊歯の芽もひらき／すぎなも青く冴えれば／あっちでもこっちでも／つかれた腕をふりあげて／三本鋤をびかびかさせ／乾田を起してあるときに／もう熊をうてばいゝか／何をうてばいゝかわからず／うるんで赤いなまこして／怨霊のやうにあるきまはる<sup>57)</sup>。

この詩の地主は人が良く、小作人に泣きつかれ、一度入った小作米もすべて借り出されてしまう。どうしていいのかわからなくなって「怨霊のようにひとりさまよう」地主は、わずかに三町歩の小地主であり、自身でも耕作している在村地主でもあった。しかし、経営が不安定な地主でもあった。決してスナイドル銃をもって狩猟を楽しむ寄生地主のような身分ではなかった。

そもそも大地主は、母方の実家の百町歩地主のように、賢治の身近に存在していた。しかし、賢治は、いずれ土地は農民に返さなければならないと考えていた。つまり、賢治は地主の没落を予想していたが、これは大地主や寄生地主の場合であった。しかし実際には、小地主が土地を失い、大地主に併呑されるかもしれないという状況にあったので、賢治が予想する地主の没落は、地主制の崩壊とは程遠いものであった<sup>58)</sup>。

この一方で、賢治は小作制度について不変であると考え、農村の骨子を「小農・小作人であつて、将来ともこの形態は変らない」「不在地主は無くなつても、土地が国有になつても、この原理は日本の農業としては不変の農組織である」としていた<sup>59)</sup>。1931（昭和6）年に小作制度を改める方法がないかと岩手県農会で聞かれた際に、賢治は「そんな事は出来ません。だんだん小作料を安くしてゆくしかありません」と答えた<sup>60)</sup>。賢治は理想の農民像を示しながら、在村の地主・小作関係を認めていたので、土地集中による大規模経営には関心がなく、自作「小農」に期待を寄せていたようである<sup>61)</sup>。したがって賢治の関心は、小農の発展とその方法にあったといえる。

羅須地人協会時代に、賢治は盛岡にあった岩手県農会によく出入りしていた。その際、農会の技師から稗貫郡は「南部甘藍」（キャベツ）の適作地であるので、岩手県の特産物にするために手伝ってくれないかという話をもちかけられた（実際に岩手県では1924（大正13）年から1933（昭和8）年の10年間で、キャベツの収穫量は約3.5倍に増加した）。これに対して、賢治は「「こうふう仕事は私にはむきません」と県農会の大森技師に断つていた。が、種畜売りの投機色のあるチンチラ兎はどうかと、田圃に新潟の様にチューリップの球根を植えましよう。之を大いに奨励して下さい。私も大いにやりますからと云つて県農会に来たつた」<sup>62)</sup>という調子であった。賢治は花巻農学校時代から、すでにチューリップに関心をもち、羅須地人協会時代に花卉園芸に熱心に取り組んでいたので、このような発言が出たのである<sup>63)</sup>。賢治が

キャベツよりも商品性の高い作物ないし換金性の高い作物に関心を示し、それによって農家経済が潤うことを願っていたようである。

羅須地人協会時代には花卉だけでなく、トマトや白菜などの蔬菜類、そしてトウモロコシなども栽培した。これら商品作物の栽培の試みは、その販売も視野に入れたものであった。当時、農業改良といえば、米麦中心の農業を推進するのが一般的であったが、これに対して賢治は商品作物に注目し、生産技術を含む関連情報の蒐集に熱心であった。農会に出入りするのも、この情報蒐集が目的であった。賢治は「岩手県農会には盛岡に来れば殆んど寄り、当時、全国の各道府県農会報が毎月刊行して、賢治は之を二時間位借覧してゐた」<sup>64</sup>と農会技師は回想している。前述のチューリップは、「新潟の様に」といっているように、新潟県の農会報などを読み、栽培の可能性を学んでいた。また、賢治が農業実践の場としていたのは、「北上川の岸近い沖積土のいわゆる砂畑二反四畝歩（約二、四〇〇平方メートル）ほどで、家から二、三分で行けた」<sup>65</sup>という川原に近い砂質土壌であったが、そういう場を選んだのも、稲の栽培は念頭になく、商品作物の栽培に有利な場所という思いがあったからである。

しかし、チューリップ栽培は投機性が高く、大きな利益を得る場合もあったが、リスクも高かった。新潟県でも大きな損害が出たこともあった。その原因は球根の海外輸出を主としていたためであった。チンチラ兎も投機性の高いものであり、農会技師らにとって、賢治による花卉園芸や養兎の企画は投機性の高い危ういものに映った。もっとも、経営は常にリスクをとまなうものであるので、賢治の企画が現実離れした理想であると片付けることはできない。問題は、そのリスクをだれが負うかである。この点で賢治がリスクを負う主体はだれかという認識を、明確にもっていたのかどうかは定かでない。

ところで、大正後期から昭和初期の農業政策では、繭価の下落による農家の窮乏に対する産業組合や農会による指導、そして昭和初期の農村恐慌時の自給自足の奨励、副業の奨励などが推進された。賢治の農業実践も、産業組合や農会などとの関わりを抜きに語ることはできない。賢治は1924（大正13）年10月5日付で「産業組合青年会」という詩をつくった（この詩の発表は賢治の死後で、『北方詩人』という詩誌の第2巻7号（1933年）に掲載された）。この詩はその日付から、花巻農学校時代の産業組合に対する関心を反映したものであった。もっとも、晩年まで推敲が重ねられたことから、羅須地人協会での経験も反映されていたと考えられる。「産業組合青年会」の詩は、

祀られざるも神には神の身土があると／あざけるやうなうつろな声で／さう云ったのは  
 いったい誰だ 席をわたったそれは誰だ／・・・雪をはらんだつめたい雨が／闇をびしび  
 し縫ってゐる・・・／まことの道は／誰が云ったの行つたの／さういふ風のものでない／  
 祭祀の有無を是非するならば／卑賤の神のその名にさへもふさはぬと／応へたものはい  
 たい何だ いきまき応へたそれは何だ／・・・ときどき遠いわだちの跡で／水がかすかに

ひかるのは／東に暈む夜中の雲の／わづかに青い燐光による・・・／部落部落の小組合が  
 ／ハムをつくり羊毛を織り医薬を頒ち／村ごとのまたその聯合の大きなものが／山地の肩  
 をひとつこ砕いて／石灰岩末の幾千車かを／酸えた野原にそゝいだり／ゴムから靴を鋳た  
 りもしよう／・・・くろく沈んだ並木のはてで／見えるともない遠くの町が／ぼんやり赤  
 い火照りをあげる・・・／しかもこれら熱誠有為な村々の処士会同の夜半／祀られざるも  
 神には神の身土があると／老いて眩くそれは誰だ<sup>66)</sup>。

この詩の題名は産業組合であるが、実際は詩の中にあるように、賢治は村ごとの農家「小組合」を想定していた。農家小組合は、産業組合が欧米から導入され政府によって奨励されたのとは異なり、農村の集落単位あるいはそれ以下の区域で、ほぼ自生的に発生したものであった<sup>67)</sup>。自生的であったために、その沿革はあまり明らかでないが、明治20年代以降に行政などによって設立が奨励されるようになり、大正期にはほぼ全国的に設立され、1925（大正14）年には全国で約77,000組合を数えた。ただし、大正期の小組合の設立は、行政や農会の指導奨励によるものが一般的となっていた。小組合には大きく2種類あり、一般的な事業を行なう組合と特定の事業を扱う組合があった。前者は農家組合・部落農業組合・農事実行組合・農事小組合・農家協同組合などの名称であり、後者は養蚕組合・家畜組合・園芸組合・副業組合・出荷組合・生活改善組合などの名称であった。つまり、前者は規模が異なるものの、現在の総合農協に近いものであり、後者は現在の専門農協に近いものであった。賢治の想定していた小組合は、後者のほうであった。ちなみに、産業組合は戦後、農会と合併して、現在の農業協同組合（総合農協）へとつながる。

農家小組合によって、ハムをつくり、羊毛を織り、医薬を頒つこと、さらに山地を砕いて大規模な土壌改良を行なうこと、ゴムから靴をつくることなどは、まさに空想にすぎないのかもしれないが、賢治は熱意をもって、産業の振興を図ろうとした。しかし、作品のなかで「祀られざるも神には神の身土があると、老いて眩くそれは誰だ」と語りかけているように、このような産業振興の中で傷ついているもの（優劣を競うなかで、その有無を問われる人びとや土地の精霊）があることを示唆している<sup>68)</sup>。

産業組合を取り上げた作品は他にもある。次の「[[こっこの顔と]]」という作品である。

われわれが気候や／品種やあるいは産業組合や／殊にも塩の魚とか／小さなメリヤスの  
 もゝ引だとか／ゴム沓合羽のやうなもの／かういふものについて共同の関心をもち／一緒に  
 それを得ようと工夫することは／じつにたのしいことになった<sup>69)</sup>。

この詩の成立年は不明であるものの、内容から羅須地人協会での活動期間であると考えられる。賢治は産業組合の事業として構想したことを、羅須地人協会によって成し遂げようとした。

羅須地人協会の「[集会案内]」において「冬間製作品分担の協議」があげられ、農民服・帽子・皮帽子・木工・木琴・ルパンカの紐の制作などが構想されている<sup>70</sup>。これは実現しなかったものの、賢治の構想はかなり現実味を帯びたものであった。この産業組合的な構想は「ポラーノの広場」においても展開された。この作品は1931（昭和6）年頃に最終的に手が入れられたようである。

ファゼーロたちの組合は、はじめはなかなかうまく行かなかったのですが、それでもどうにか面白く続けることができたのでした。私はそれからも何べんも遊びに行ったり、相談のあるたびに友だちにきいたりして、それから三年の後にはたうとうファゼーロたちは立派な一つの産業組合をつくり、ハムと皮類と醋酸さくさんとオートミルはモリーオの市やセンドグの市はもちろん広くどこへも出るやうになりました<sup>71</sup>。

と描かれた。

この童話からも明らかなように、賢治の構想は農業自体の発展を計画するものではなく、どちらかという「副業」の奨励であったといえる。賢治には文語詩「副業」という作品がある。

雨降りしづくひるすぎを、青きさゝげの籠とりて、／巨利を獲るてふ副業の、銀毛兎に餌すなり。／兎はついつぐのはね、ひとは頬あかく美しければ、／べつ甲ゴムの長靴や、緑のシャツも着くるなり<sup>72</sup>。

明治期以降、兎は愛玩・毛皮・食肉として飼育された。現金収入を得るための副業として奨励されたので、岩手県の農村では普及した。ちなみに、「銀毛兎」という言葉は、高級毛皮用の兎を意味する賢治の造語である<sup>73</sup>。しかし「つぐのはね」とあるように、農業者の副業はその労苦に報いるものではなかった。それにもかかわらず、頬はあかく生き生きとし、服装も緑のシャツにゴムの長靴という、決して貧相とはいえない格好の描写である。この描写から、副業は生活苦から、やむをえず手を出すものではなく、少しでも利益を得ようとする投機色の強いものであると想像できる。もちろん、副業全般がそういう意味合いのものであったとはいえないが、当時の岩手県では、県庁・農会・産業組合などによって、養蜂・養豚・養鶏・竹細工・綿羊飼育・バター・ハムなどの副業が奨励された<sup>74</sup>。しかし実際には、副業の多くは現金収入を得るための、その場しのぎの策であり、成功したものは少なく、農家の生活を大きく改善するものとはならなかった。この状況の中で、賢治の行動として興味深いのは、前述のように農会などが奨励し成果を上げていたキャベツの栽培を断って、投機色の強い毛皮用のチンチラ兎の飼育を勧めたことである。賢治が投機性のある商品をわざわざ奨励したとはいえないが、少なくとも行政や農会などによる指導は嫌っていたことがわかる。賢治は農会に対して、農事の

改良発達を掲げていたものの、「全国的に組織された国家主義の色濃い「帝国農会」を頂点とする農業統制団体だった」という批判的な見解をもっていた<sup>75)</sup>。

一方、賢治は先進的な技術を取り入れた企業的農業に対して不安を感じていた。たとえば、童話「耕耘部の時計」<sup>76)</sup>では企業的農業において自由に移動する（職場を転々とする）ことが可能な労働者という、企業的農業のひとつの形態が表現されている。さらに童話「オツベルと象……ある牛飼ひがものがたる」<sup>77)</sup>では企業的農業を背景として、自由な農業労働者としての農民と、企業的農業のあり方が描かれている。「オツベルと象」では、オツベルという資本家の独裁状態にあって、オツベルが労働をしなくても、16人の百姓は雑巾ほどもあるオムレツを食べられること（報酬）に疑問を抱かないという屈折した状態が表現されている。そこには企業的農業が陥りがちな暗部が描かれている。「オツベルときたら大したものだ」と繰り返される語りには、企業的農業を行なうオツベルへの羨望が含まれる。その下で働く百姓はオツベルの行動を見て見ぬ振りをする一方で、最後は主人を簡単に裏切るなど、自由であると同時に、個人相互の結びつきの希薄さが表わされる。「耕耘部の時計」の主人公も、周囲となじまない人物である。企業的農業には、その労働者は縛られない自由さがある一方、結びつきが希薄であるため、身分が不安定であるという欠点をもっていることを示唆する。とくに、賢治は行政主導の企業的農業には、このような特徴が出る傾向があるので疑問を感じている。

賢治は農会に対して批判的な見解をもっていたが、農会のほうでは賢治の農業活動を高く評価していた。『岩手県農会報』には、「農界の特志家 宮沢賢治君」と題して、次のように賢治の活動を伝えている。

最近二度ほど君の仕事を見たに、冬閑には農家の希望によつて学術講演に近村に出掛けて殆ど寧日がないとか、而して決して謝礼を受けない、昨今は旧土木管区事務所に出張して農家の相談相手となり肥料設計をして居る。数日前君の所謂店を利用したるに箱の様な代用机三四脚の腰掛け其処で十四五名の農家は順番に設計の出来るのを待つて居つた、非常に丁寧な遠慮深い農家達だと思つたに、此は皆な無料設計で用紙なども自宅印刷なのであつた。自己を節するに勇敢で他に奉ずることに厚いと噂に聞いて居る宮沢君は世評の如く誠にかざらざる服装で如何にも農民の有力な味方の感があつた（『岩手県農会報』、第188号、1928年、26ページ）。

とくに農会は、賢治による肥料設計を高く評価していた。もっとも、農会技師は賢治の農業実践に賛意を表明していたものの、肥料設計に関しては不安を抱いていた。賢治の肥料設計は農会のそれよりも多くの肥料を投入し、多くの収穫をあげようとするものであり、そのうえ相談料が無料であったからである。こういった状況は、

大正一二年九月に、岩手県農会は新事業として、中経営一戸、小経営二戸、部分的共同経営組合一組合を選定し、農業経営の設計作成からその実施を県農会の技師（大森堅弥）技手（佐藤有三）一何れも賢治の同窓生が担当指導した。賢治が羅須地人協会で行った稲作指導はその軌を一にするものであつた。（中略）肥料設計は県農会の肥料設計に比して多肥多収のもので化学肥料が多い様に感じられ（中略）二千枚も肥料設計書を書いたと云はれる賢治は、その作柄の成否には心配であつたと思はれる。と同時に、当時の農業技術員は、勇敢に「肥料設計」を沢山作るのに驚歎し、危惧の念も抱いていたものだ。賢治の天才と勤勉それに稗貫郡下の土性調査の結果が、之を押し切つたのであろう。（中略）従来の農家の小肥に油粕、大豆粕を硫酸、石灰窒素、加理肥料に置換する賢治の「肥料設計」は設計を講義され作成して貰つた農家にも幾分は当惑感があつたと云はれている<sup>78)</sup>。

と伝えられている。

賢治の肥料設計は岩手県農会のそれよりも多肥（多収）という特徴をもつものであつた。しかし、農会は賢治と同様、土性調査を実施したものの、指導は毎月の巡回指導だけであり、その対象となる農家も少なかった。しかも農会は1923（大正12）年（新農会法の施行）以降、会費の強制徴収権が認められていたので、肥料設計は有料であつた。これに対して賢治のそれは、前述のように無料であつた。賢治が多肥多収を主張したのは、「先づ経済生活を潤沢にして後、精神生活に覚醒を来させる」という方針に基づいて、短期間に地域全体の増収を図るという性急な狙いがあったからである。しかし、それはあまりにも性急なものであつたので、前述のチンチラ兎と同様、農民にとっては取っ付き難いものであつた。

副業にしても肥料設計にしても、賢治は農家側の実態を把握していたとは言い難い。当時の農家の実情や問題点については、1928（昭和3）年の「農家経済調査雑感」において、農会技師の佐藤有三によって指摘されている。たとえば、農家は自分の農地の面積を知らない、収穫高についても数字で理解していないなどと指摘している。そして、たとえ肥料設計の講演や講習を聞いたとしても、実際の施肥が不十分であることを棚に上げて、「暗に其の施肥標準は出たら目な或机上のものであつたとか言ふ様なことを仄めかして置く」（『岩手県農会報』、第190号、1928年、36ページ）と農会を批判する。賢治と農会では、やり方に違いがあつたとはいえ、農家に農業指導の内容が伝わっていたとは言い難かつた。それゆえに、指導する側と受ける側で、互いに「無知」と「デタラメ」という感情を抱いていた。そして少なくとも農会のほうは、1928（昭和3）年頃から、それまでの農業状況の理解という姿勢から、農民の後進性を啓蒙しようという姿勢に転じていった。

賢治の姿勢は農会の姿勢とは異なつていた。1927（昭和2）年頃に執筆されたと考えられる随想的作品「或る農学生の日誌」では、それと関連する三つの特徴がみられる<sup>79)</sup>。一つは、農村経済を潤すために農業の機械化や労働の芸術への転化は一旦棚上げされ、米穀の収穫増が描

かれている点である。二つは、主人公が農学校を出て知識を身に付けた者として孤独を味わう点である。まさに賢治が独自の肥料設計を行ない、実験として花卉や蔬菜の栽培を行なったことで、農会との間に距離が生まれ、農民とも協調できなかったことを暗に示唆している。三つは、主人公が記録しているのは、日記ではなく、日誌になっている点である。日誌というのは、私的な記録ではなく、公開を前提として書かれるものであり、賢治は人にみせることを前提にする資料という意味を込めたものであると考えられる。農業を学ぶ主人公の試みは孤独であり、すぐに成果が出そうにない。しかし農村内での試みについて、「ぼくと同じやうに本気に仕事にかゝった人でなかったら、こんなもの実に厭な面白くもないものにちがひない」と記して、本気でやろうとしている者との共感を求め、「ぼくのやうに働いてゐる仲間よ、仲間よ、ぼくたちはこんな卑怯さを世界から無くしてしまはうでないか」<sup>80)</sup>と強烈なメッセージを発している。

賢治は肥料による農業改良だけでなく、羅須地人協会時代の活動にもあらわれているように、農村の将来を構想することの重要性を訴える。しかし、農村の未来を構想する主人公は孤独であったので、同じ意思をもつ仲間を期待する。もっとも、仲間と呼びかける賢治には、農民が本当に幸福になるのかという展望が十分になかった。ただそうしなければならない、という切迫した態度の中に、メランコリーとしてとらえられる賢治の苦悩と焦燥をみることができる。もし精神状態の変化にともなう思考形式の変化を考慮に入れずに、その行動を経済学や倫理学の観点からだけで批判すれば、賢治は空想的社会主義者あるいは人道主義的ユートピアンにみえてしまう可能性がある<sup>81)</sup>。

賢治の構想は空想的なものでなく、きわめて具体的なものであり、農村問題の改善にとって農業技術が重要な役割を果たすと考えている。賢治の友人の話によれば、賢治によって「疲弊を打開するために考えられたことは、品種改良、増産、土壌の改良、肥料配合の研究、農村指導の中堅人物の養成など多岐にわたる目標をかかげて進むことであった。生徒に対しても、卒業後は、農村にとどまって祖先以来の鋤をとって農耕に従事することを堅く教えた」<sup>82)</sup>という。賢治は科学技術を信奉する技術中心主義を推進したといえるが、当時の農村で重要な課題であった地主制の問題についてあまり語ることはなかった。賢治は「詩人農業技師」<sup>83)</sup>といわれているように、独創的な感性をもった詩人・作家であり、誠実な農業技師であった。しかし経済社会問題の考察や分析においては、理想を示すだけで、現実味に乏しかった。たとえば、それは社会主義や農地改革に対する姿勢にあらわれている。賢治は社会主義に関してよく知っていたようであり、農地改革の必要性を認めていたようである。しかしながら、賢治は「全ては円い形で進んで行かなければならないと言う態度であった。そしてそれは宗教によって支えられて」<sup>84)</sup>という姿勢をとり続けた。

結局、賢治による技術の信奉は、当時の農会や農政当局の推進した方向性とほぼ変わらないといえるかもしれない。実際に、小作問題に着手した農政担当者であっても、その政策は遅々

として進まなかった状態であったので、農村問題を解決しようとすれば、農業技術を強調せざるをえなかった。もっとも、技術の強調だけでは、根本的な問題の解決にならなかったのもので、農業政策は精神論の強調や移民の奨励へと移行していった<sup>85)</sup>。賢治は盛岡高農時代から、「今後の社会問題は農村対都会という重大問題の解決である。刻々に疾幣<sup>ママ</sup>してゆく農村をどう処理するか、農民の生活を顧みずして財界の安定も、商工業の振興も、産業立国も出来ない」としていた。さらに羅須地人協会時代に「都会と農村の対立から農民は搾取されると考へ、自給自足経済の農民生活を試みようとしたわけだ。当時、岩手県農会でも、この「自給自足経済」を農村不況対策として奨励し始めていた。そこで賢治は、貨幣を用いない農民生活を考へていた筈である」<sup>86)</sup>。農を国の本としてとらえ、農村問題を都市と農村の対立に帰着させようとするのは、当時の典型的な農本主義の姿であった。この点で賢治の考えは、明治末期以来、わが国でしばしば現れる農本主義と、何ら変わらないものであったといえるのかもしれない。

#### 4 農民と疎外感

賢治は農業実践や作家活動を通じて、「自活」したことはなかった。東京での1年足らずの自活（印刷会社に勤務）を除けば、盛岡高農卒業以来、ほぼ親がかりであった。農学校時代は給与を得ていたが、それは本代やレコード代に使われた。羅須地人協会の2年余りは、もちろん収入はなかった。つまり、賢治の農業・農村活動は宮沢家によって支えられていた。肥料設計に関わる補償にしても、その財源は親元であった<sup>87)</sup>。このことから、農民は自身の窮状を改善したいと願っていたが、賢治を自分たちの救済者とはみなしていなかった。賢治の実践活動によっても、農民の猜疑心を消し去ることはできなかった。

農民の猜疑心がある中で、前述のように、積極的に商品作物を導入することを勧める賢治の姿は、どのように映ったのであろうか。賢治の童話のなかに「盛岡の産物のなかに、紫紺染といふものがあります」の一文で始まる「紫紺染<sup>しこんぞめ</sup>について」という作品がある<sup>88)</sup>。この作品は「山男」が登場し、人間の役に立つという物語である。紫紺染は紫草（ムラサキ）という植物の根からとった染料で染め上げた染物のことである。山男は、黄金色の目玉で、あかつらで、大男で、すばやい動きをするという特徴をもつ。山男の表現は、柳田国男（1875-1962、以下は柳田）が『遠野物語』（1910年刊）で記述した「山人」と酷似している。柳田は『遠野物語』の序文で「願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」<sup>89)</sup>と述べ、山男・山女・山の神などの総称である山人と、平地で稲作を営む民とを全く別の系譜としてとらえる。そこには平地の民と山人との間の断絶がみられる。しかし、柳田の山人とは異なり、賢治の山男は、紫紺染に関する情報提供者がいなくなったので、仕方なく招待される存在となり、断絶がないように描かれている。

山男は会食の席に出席して、「アスパラガスやちしゃのやうなものが、山野に自生する様に

ならないと、産業もほんたうではありません」という少し突飛な発言をする。アスパラガスは明治期以降に日本に輸入された蔬菜であり、チシャ（レタス）も同様であった<sup>90)</sup>。いずれも日本に自生する蔬菜ではないが、山男が言いたいのは、アスパラガスやチシャが広がって、蔬菜が多様にならなければ、農業の発展もないということである。まさに賢治の実践を、山男が代弁している。問題は山男がどのように扱われているかということである。山男が農業や作法について学習することで、農民に近づき、何とか乗り越えられるところもあったということになっている。物語では賢治とおぼしき山男を、人間（農民）は積極的に排除しようとしていないが、本当に受け入れられているかどうかは疑問視される。つまり、賢治自身は農民に受け入れられていると信じていたが、受け入れている農民の本音はわからない。

あたかもこの山男が説くかのように、1926（昭和元）年の1月から2月にかけて、5回にわたって花巻農学校で賢治の連続講演が行なわれた。「トルストイの芸術批判」「自作の詩の紹介」「稲作と湿度」「宅地設計の仕方」「農民芸術概論」などについて賢治は講演をした。しかし連続講演は成果をあげたとはいえない。熱心に講義が行なわれ、「アタマのよい子どもだから」と信じ、要点を説いたようである。しかし生徒のひとりなどは、「正直言ってよくわからなかった。だれもそうだったと思う」と述べている。残念ながら「わからない」と賢治に告げる生徒はなく、羅須地人協会でもほぼ同内容の講義が行なわれたが、参加者は賢治の講義を聞いて、難解なあまり、途中で居眠りを始めている<sup>91)</sup>。全体的に賢治の農事講演は農民には難しかったようである。農民にとって賢治のことは「百姓たちには、むしろただあの人はいらい人だだけ感じ、どこがえらいかということではわからなかった」<sup>92)</sup>という印象であった。

賢治はとまどいを感じた。良かれと思って熱心に講演をしても、むしろ逆効果でさえあった。「境内」<sup>93)</sup>と題された詩の中に「そのまっくらな巨きなものを／おれはどうにも動かせない／結局おれではだめなのかな」という一節があり、さらに社殿の「うすくらがりの板の上に／からだを投げておれは泣きたい／けれどもおれはそれをしてはならない／無畏 無畏／断じて進め」で終わっている。これまでの解釈では「そのまっくらな巨きなもの」こそ、賢治が農村活動でぶつかった社会であり、それに対する自らの無力の嘆きであると考えられてきた。しかしその後、前後の文脈から「まっくらな巨きなもの」は農民の「心」であるということが明らかとなっている。

「境内」の情景は、賢治の実体験を通して、次のように表現されている。ある会合（おそらく村の出役）が神社の境内で行なわれるが、賢治は近所でパンなど買える（冬には売っていた）と思って、弁当をもっていかなかった。そこで詩は「みんなが弁当をたべてゐる間／わたくしはこの松の幹にかくれて／しばらくひとり憩んでるよう」で始まる。つまりパンを買うことができなかった。買えなかった理由は、朝から酒を飲んでいて店屋の主人が、じろっとふりむいて、

パンだらそこにあったっけかと／右手の棚を何かさがすといふ風にして／それから大へんとぼけた顔で／ははあ食はれない石パンだと／さう云ひながらおれを見た／主人もすこしもくつろがず／おれにもわらふ余裕がなかった／あのぢいさんにあすこまで／強い皮肉を云はせたものを／そのまっくらな巨きなものを／おれはどうにも動かせない／結局おれではだめなのかなあ。

という具合である。賢治は店の主人の意地悪い態度に傷つく。しかし、このような態度をとるのは店の主人だけではなかった。賢治は農村での活動を通じて、すべての農民に慕われたわけではない。疎外感、農民の怒り、冷笑、嫉視に出会う。賢治はこれらを「境内」の詩で表現したのである。

こういった疎外感は他の詩でも表現される。1927（昭和2）年3月16日の作品では、

土も掘るだろう／ときどきは食はないこともあるだろう／それだからといって／やっぱりおまへらはおまへらだし／われわれはわれわれだと／・・・山は吹雪のうす明り／なんべんもきき／いまもきゝ／やがてはまったくその通り／まったくさうしかできないと／・・・林は淡い吹雪のコロナ／あらゆる失意や病気の底で／わたしもまたうなづくことだ<sup>94</sup>。

農民と同じ生活をしているつもりであっても、賢治と農民の間には壁があった。同年4月21日の作品では、賢治が初めて導入したリヤカーに対する農民の嫉視を感じて、

われわれ学校を出て来たもの／われわれ町に育ったもの／われわれ月給をとったことのあるもの／それ全体への疑ひや／漠然とした反感ならば／容易にこれは抜き得ない<sup>95</sup>。

ことを悟らなければならなかった。学歴や俸給生活者に対する農民の反感は根深いものであり、賢治はそれに立ち向かわなければならなかった。

そして天候不順で稲が不作のとき、それがたとえ肥料設計の責任でなくても、

降る雨はふるし／倒れる稲はたふれる／たとへ百分の一しかない蓋然が／いま目の前にあらはれて／どういふ結果にならうとも／おれはどこへも遁げられない／（中略）／もうレーキなどはふり出して、／かういふ開花期に／続けて降った百ミリの雨が／どの設計をどう倒すか／眼を大きくして見てあるけ／たくさんのこはぼった顔や／非難するはげしい眼に／保険をとっても弁償すると答へてあるけ<sup>96</sup>。

と自らを鼓舞しなければならなかった。しかし農民の対応は「倒れかかった稲のあいだで／ある眼は白く忿ってゐたし／ある眼はさびしく正視を避けた」<sup>97)</sup>と冷たいものであった。賢治は農業実践に対して、次のような篤農家の冷笑も浴びた。

(この逞ましい頬骨は／やっぱり昔の野武士の子孫／大きな自作の百姓だ)／(息子がいつでも云ってゐる／技師といふのはこの男か／も少しからだも強<sup>シ</sup>くつて／何でもやるかと思つてゐたが／これではとても百姓なんて／ひどい仕事ができさうもない／だまって町で月給とつてゐればいゝんだが)／(お互じつと眼を見合せて立ってゐれば／だんだん向ふが人の分子を喪くしてくる／鹿か何かのトーテムのやうな感じもすれば／山伏上りの天狗のやうなところもある)／(中略)／(ぜんたいいまの村なんて／借りられるだけ借りつくし／負担は年々増すばかり／二割やそらの増収などで／誰もどうにもなるものでない／無理をしたって却つてみんなだめなものだ)／(眼がさびしく愁へてゐる／なにかかもわかりきつて、／そんなにさびしがられると／こっちもたゞもう青ぐら<sup>シ</sup>いばかり／遠征につかれ切つた二人の兵士のやうに／だまって雲とりんごの花をながめるのだ<sup>98)</sup>。

篤農家は賢治の農業実践に対して冷ややかであったものの、篤農家が感じている無力感、賢治と共通するものであった。農村のリーダー的存在であった篤農家の言葉を借りて、賢治は失望感を表現した。しかし、賢治の抱いた失望感や無力感、当時の農業に関心をもつ都市部の知識人がもった感情とは、基本的に異なっていた。賢治の場合は、空想に基づくものではなく、農村での実体験に基づくものであったからである。

賢治は積極的な行動をとつたものの、農村社会に溶け込めない「孤独」を感じていた。たとえば、村の祭りにおいては、

火祭りで、／今日は一日、／部落そろつてあそぶのに、／おまへばかりは、／町へ肥料の相談所などこしらへて、／今日もみんなが来るからと、／外套など着てでかけるのは／いゝ人ぶりだといふものだと／厭々ひっぱりだされた圭一が／ふだん<sup>シ</sup>のまゝの筒袖に／栗の木下駄をつっかけ／さびしく眼をそらしている／(中略)／くらしが少しぐらみらくになるとか／そらが少しぐらみきれいになるとかよりは／いまのまんまで／誰ももう手も足も出ず／おれよりもきたなく／おれよりもくるしいのなら／そっちの方がずつといゝと／何べんそれをきいたろう／(みんなとおなじにきたなくでない／みんなおなじにくるしくでない)／(中略)／さうしてそれもほんたうだ／(ひば垣や風の暗黙のあひだ／主義とも云はず思想とも云はず／たゞ行はれる巨きなもの)／誰かがやけに／やれやれやれと叫べば／さびしい声はたった一つ／銀いろをしたそらに消える<sup>99)</sup>。

というように、孤独な賢治は村民の精神構造に対して批判的であった。しかし自分に向けられる差別や冷淡さ以上に、「巨きなもの」という農民相互にみなぎる悪意のようなものに失望さえ感じていた。

童話「注文の多い料理店」には、賢治が花巻で抱いた疎外感の反映とみられる箇所がある<sup>100)</sup>。それは、標準語を話す者と方言を話す者との間に存在する位階構造を、賢治が意識したことであった<sup>101)</sup>。賢治は標準語を話すことを価値あることとみなしていたわけではなかった<sup>102)</sup>。しかし、農民には標準語を話す者は自分たちとは違うとみなす意識があった。そうした雰囲気の中で賢治は浮き上がった存在と感じざるをえなかったであろうことは容易に想像がつく。実際に、羅須地人協会での賢治の活動を阻害した要因のひとつは、賢治を異物視する農民の視線であった。

一方、童話「銀河鉄道の夜」では、共同体からの疎外に触れている<sup>103)</sup>。この童話は星祭りの夜の物語であるが、祭りが一般に共同体の表徴であることは知られている。物語は共同体から疎外されたひとりの少年（ジョバンニ）が、孤独のきわみの幻想の中で、共同体の軸そのものへと一気に自己を昇華し、浄化し、聖化することを媒介として、共同体の中に再び降り立つという筋立てになっている。孤独のジョバンニが町はずれの丘で、草にたおれると、夜の祭りの軸である銀河それ自体のなかに自分を見出す。ジョバンニは、この自己浄化や自己聖化を媒介として、はじめて祭りのなかに降り立つ。つまり、賢治の疎外に対する願い（あるいは誓い）が表わされている物語といえる。

賢治は羅須地人協会の活動で挫折感を抱いた。賢治の理想は、農業技術の向上による増収で農民生活が豊かになり、同時に芸術を通じて農民の心を豊かにするというものであった。羅須地人協会はその理想に寄与するものであった。しかし、その理想が十分な成果をもたらさなかったことは、自覚せざるをえなかった。その自覚をもたらしたものは、農民の心に横たわる「まっくらな巨きなもの」によって、賢治と農民が隔てられているという認識であった。こういった挫折感から羅須地人協会の活動も止めようとした。これを表明したのが、詩「雨ニモマケズ」であった。賢治が死去の10日前に書いた手紙から、中村は『『雨ニモマケズ』は羅須地人協会からの全面的退去であり、『農民芸術概論』の理想主義の完全な敗北である』<sup>104)</sup>と記している。「雨ニモマケズ」の基調は、自己犠牲あるいは献身であったので、賢治の生きざまと切り離して考えることは困難である<sup>105)</sup>。しかし、そこには「春と修羅」のような精神の若々しい躍動は、もはや感じられない。

もっとも、賢治の自己犠牲や献身という姿勢が、農民にどれだけ評価されたのかは、不明である。少なくとも羅須地人協会に集まった農民や農学校の生徒は、賢治の姿勢が理解できたはずである（これらの人びとが、賢治の死後、賢治伝説を語っていった）。賢治は農民と対等に、その一員になろうとした。しかし、それ自体は矛盾した試みであった。農業技師は農民ではなく、詩人ももちろん農民ではなかった。賢治と農民との間にある断絶に対して、賢治の絶望感

さえうかがえる。そして農民への絶望感を抱きながら、献身する姿勢を貫くことは、賢治には大きな負担となった。この重荷は賢治に限らず、当時の農業に興味をもった知識人に共通のものであろう。しかし、多くの知識人の活動は往々にして独りよがりにならざるを得なかった。しばしば知識人であることを捨てることによって、農民と同じ境遇に立とうとするが、それは前述のように矛盾となった。純粋な農民になれば、知識人の存在意義はなくなってしまう。知識人である限り、農民と同様の生活をしたとしても、決して農民にはなれなかったのである。

しかし賢治の場合、絶望感こそが多くの作品を生み出す原動力となった。賢治の童話はおしなべて悲しい。それは無垢なるもの、みにくいもの、弱いものへの共感が作品の動機となっていたからである<sup>106</sup>。まさに疎外されているものへの共感であった。賢治自身も、農民からの疎外を感じることで、共感は阻害された存在との対話へとつながる。賢治の童話ばかりでなく、詩や短歌もその対話の結晶であった。一般に知識人の農業・農村志向は、トルストイ（1828-1910）以来の肉体労働コンプレックス、精神労働の分業性の否定によるものであった。もっとも、そこには芸術の専門性は明らかに存在していた。しかし、賢治は芸術の専門性を否定した。働く農民の芸術こそが芸術の本来のあり方であるという考えに立っていたからである。賢治が描いた理想郷は、分業もなければ、貨幣もない自給自足の社会であった。そこではすべての人が農民であり、すべての人が芸術家なのであった。

## 5 結びにかえて

戦前期において、日本社会の底辺を支える農民の貧しさと労働の過酷さは、だれしも認識できるものであった。農民に関心をもった知識人は、この問題について倫理的に対処し、それが原罪意識を生み出した。農場のみならず財産放棄にまで進んだ有島、弁護士への道を捨てて農民運動に身を投じた島木、そして厳しい献身を自らに課した賢治、いずれも農民への思いを自らの生きざまや倫理へと昇華した人びとであった。これらの人びとが、禁欲的な倫理の持ち主である点は共通していたが、それは農民にとって、しばしばマイナスに作用した。とくに賢治の場合、農業実践に関わりをもち、農業への思い入れは強かったので、そこで生まれる悩みは深かった。しかし、逆にこの悩みの深さこそ、多くの詩や童話を生み出す原動力となった。

当時の農業の状況から考えて、副業や多肥多収などは現実を無視した理想的すぎるものであった。しかし、これは賢治の想いが、「自分は詩人としては自信がないが、一個のサイエンティストとしてだけは認めてもらいたい」<sup>107</sup>と自ら記しているように、ひとりの科学者ないし土壌学者として認められなかったことに由来する。賢治の作品は非科学的な部分もあるが、賢治の実際の活動をみた場合、科学者の行動として評価できる点が多い。賢治は稗貫郡の地質・土性調査に従事し、農学校で土壌教育を行ない、さらに羅須地人協会の設立以降、肥料設計の指導や炭酸石灰の普及に従事した。これらの活動を通して、土壌肥料分野に対する貢献は

大きいと考えられる。

賢治は「農民芸術概論綱要」において「宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は冷く暗い」と書く。これは科学が人間の不幸につながるものを生み出したことに対する批判ととられがちであるが、そうではなくて、科学が冷く暗いのは、そこに人間の願いを込めるきっかけがないからである。その解決の方途として提示されたのが前述の「グスコブドリの伝記」であった。そこには祈りがあった<sup>108)</sup>。しかし、賢治は実際の農業と近代農学とのほざまで摸索を繰り返した。とくに、羅須地人協会での活動は、賢治の健康上の問題と社会主義思想の弾圧という政治社会状況によって、賢治が望んだような成果をあげることはできなかった。しかし、こうした問題がなかったとしても、成果をあげることは困難であった。東北、とくに岩手の農村問題の多くは、ひとりの人間の力の範囲を超えた日本の経済社会システムから生まれていたものであったからである。たとえ賢治が新たな農産物の栽培に成功したとしても、地主・小作問題を解決することなしには、農民がそうした作物の栽培を行なうことは難しかったであろう。

賢治は農村問題の解決にとって有効な手段として、科学技術の適用と同様、農家小組合の活動を重視した。政府は農会や産業組合の活動に力を入れたが、賢治は農業の実践や指導において、農会と産業組合と関わりつつも、自分の方向性がぶれることはなかった。それは米穀の増産という「米穀唯一」への挑戦であった。それは個人的な活動ではなし得ない、限界性をもった活動であった。しかし、賢治は農会や産業組合の統制機関的な体質を嫌い、農民の自発性と創意工夫を重視し、自らも実践した。その軌跡が盛岡高農学時代から晩年までの農業実践と挑戦であった。もっとも、農会や産業組合も日露戦争以後に一応、自発的な団体形成という特徴をとりつつ、半官半民的な色彩の強い団体として設立されたものであった。こうした団体は伝統的な共同体を「組合」化の方向で再編強化することを目的としていたが、この過程で国家・むら・いえなどと区別された「社会」という概念の枠組みがつくられていった<sup>109)</sup>。そして19世紀から20世紀への世紀の移行期に、この概念を使って社会問題にどのように対処すべきかが、重要な課題となった。要するに「国家」の発見によって開始した「明治の精神」の道程は、解体状況を迎えていた<sup>110)</sup>。それまでの国家に代わる「社会」の発見である。賢治の活動はこういった動向のなかで、国家ではなく社会というものを意識して行なわれた。

農村活動という観点からみると、賢治は自らの無力さに打ちのめされることが多かった。しかし、それこそが賢治を創作や信仰へと駆り立てる原動力となった。言い換えると、科学技術に代表される近代と、血縁や地縁に代表される伝統との葛藤が、創作活動に向かわせた大きな要因になったということである。しかも、この葛藤は内省的に進んだために、優れた作品群を生み出した。賢治の職業が文筆家ではなかったことも幸いした。なぜなら、さまざまな葛藤を抱え続けることができたからである。文筆家という「逃げ場」を失っていたため、精神的に追い詰められたものの、作品の表現は、より直接的でわかりやすいものになった。葛藤は複雑で

あるものの、表現を簡潔にわかりやすいものにしようとするれば、必然的に詩や童話という形態をとらざるを得なかった。さらに、賢治は自然・文化・人間を一体として、詩と童話をつづつた。賢治は作品を通じて自然との付き合い方を示した<sup>111)</sup>。これは今後の科学や農学のあり方に通ずるものであるともいえよう。

## 注

- 1) 奥田弘「宮沢賢治研究史」(草野心平編『宮沢賢治研究Ⅱ』筑摩書房, 1969年, 227～41ページ); 奥田弘「宮沢賢治研究史」(『新修 宮沢賢治全集』別巻, 筑摩書房, 1980年, 335～47ページ); 続橋達雄「宮沢賢治研究史—受容と評価の変遷(2)」(続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成』別巻Ⅱ, 日本図書センター, 1992年, 41～62ページ)。以下では、『新修 宮沢賢治全集』は『新修全集』と略し, 出版社(筑摩書房)も略す。
- 2) たとえば, 代表的な例が武者小路の「新しき村」である。これは賢治による「羅須地人協会」の実践の8年前であった。前田速夫『「新しき村」の百年<愚者の園>の真実』新潮新書, 2017年, 148～52ページ。
- 3) 近代日本の知識人と農業の関係は, 持田恵三『近代日本の知識人と農民』家の光協会, 1997年。
- 4) 大島丈志『宮沢賢治の農業と文学—苛酷な大地イーハトーブの中で』蒼丘書林, 2013年, 8ページ。
- 5) 拙稿「戦時体制下の食糧政策と統制・管理の課題」(『京都産業大学論集社会科学系列』, 第35号, 2018年, 21～49ページ)。
- 6) 佐藤惣之助「十三年度の詩集」(『校本 宮沢賢治全集』第十四巻, 筑摩書房, 1977年, 1082ページ)。
- 7) マロリ・フロム著/川端康雄訳『宮沢賢治の理想』(晶文社, 1984年)によれば, 「農民芸術概論綱要」に対する評価が高く, 賢治の生活と芸術についての成熟した哲学であり, 「理想的存在」の宣言であるという。
- 8) 山折哲雄「私の履歴書(雨ニモマケズ)」(『日本経済新聞』, 2018年3月12日付)。
- 9) 奥田弘「「ヒデリ」寸見」(奥田弘『宮沢賢治研究資料探索』蒼丘書林, 2001年, 273～9ページ)。
- 10) 和田文雄『宮沢賢治のヒドリ—本当の百姓になる』コールサック社, 2008年。
- 11) 栗原敦「資料と研究・ところどころ(8)小倉豊文の最晩年の論考のこと(「ド」と「デ」)・日雇のこと」(『賢治研究』, 第110号, 2010年, 6222-5ページ)。
- 12) 川原仁左エ門「羅須地人協会」(川原仁左エ門編著『宮沢賢治とその周辺』私家版(刊行会出版), 1973年, 272～3ページ)。
- 13) 佐藤隆彦『新版 宮沢賢治—素顔のわが友』富山房, 1994年, 55～6ページ。
- 14) 「(1932年)6月21日 母木光あて封書」(『新修全集』第十六巻, 1980年, 348ページ)。
- 15) 中村稔『定本 宮沢賢治(増補版)』芳賀選書, 1966年, 83ページ。
- 16) 同上書, 43～4ページ。
- 17) 名須川溢男「賢治と労農党」(『新修全集』別巻, 1980年, 286～96ページ)。
- 18) 岩手県農地改革史編纂委員会『岩手県農地改革史』不二出版, 1990年(復刻版), 78～9ページ。
- 19) 斎藤文一『宮沢賢治とその展開—氷室素の世界』国文社, 1976年, 77～115ページ; 桜井弘『宮沢賢治の元素図鑑—作品を彩る元素と鉱物』化学同人, 2018年。
- 20) 境忠一『評伝 宮沢賢治』桜楓社, 1975年, 82ページ。
- 21) 「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」(『新修全集』第十五巻, 1980年, 455～65ページ)。
- 22) 井上克弘「土壌肥料と宮沢賢治1—ペドロジスト, エダフォロジストとしての賢治」(『日本土壌肥料学雑誌』, 第67巻2号, 1996年, 206～12ページ); 亀井茂「土壌肥料と宮沢賢治2—関豊太郎と宮沢賢治」(『日本土壌肥料学雑誌』, 第67巻2号, 1996年, 213～20ページ); 藤井一至『土地球最後のナゾ—100億人を養う土壌を求めて』光文社新書, 2018年, 187～212ページ)。
- 23) 「(1918年)2月1日 宮沢政次郎あて封書」(『新修全集』第十六巻, 1980年, 40ページ)。
- 24) 「(1918年)6月20日 宮沢政次郎あて封書」(『新修全集』第十六巻, 1980年, 74ページ)。

- 25) 「[それでは計算いたしませう]」(『新修全集』第七卷, 1980年, 280～3ページ)。
- 26) 農学校での4年半あまりは、賢治にとって充実していたようで、楽しいエピソードが数多く残されている。菊池忠二「花巻農学校の教師生活について」(草野心平編『宮澤賢治研究Ⅱ』筑摩書房, 1969年, 265～71ページ); 森荘巳池『宮沢賢治の肖像』津軽書房, 1983年。またフィールド教育を重視したようである。田中俊明「宮沢賢治のフィールド教育の現代的意味」(『子ども未来学研究(梅光学院大学子ども学部)』, 第5号, 2010年, 49～58ページ)。
- 27) 堀尾青史『年譜 宮沢賢治伝』図書新聞社, 1966年, 203ページ。
- 28) 「修学旅行復命書」(『新修全集』第十五卷, 1980年, 473ページ)。
- 29) 「(1931年)2月25日 関豊太郎あて封書」(『新修全集』第十六卷, 1980年, 264～6ページ)。
- 30) 関豊太郎「宮澤賢治氏に對する追想」(草野心平編『宮澤賢治研究Ⅰ』, 筑摩書房, 1958年, 234～5ページ)。関は書簡のやり取りをした当時は、すでに1920(大正9)年に農事試験場土性部に転任して、そこに属していた。土性部には1942(昭和17)年まで在籍した。
- 31) 「(1925年)6月25日 阪阪嘉内あて封書」(『新修全集』第十六卷, 1980年, 194～5ページ)。賢治の作品の中には「ほんとう(ほんたう)」「本統」という言葉が頻繁に出てくる。賢治は「ほんとう」を法華經に帰依し、開示している真理に入って、実行することであると考えていたようである。吉本隆明『宮沢賢治』ちくま学芸文庫, 1996年, 180～96ページ。
- 32) 「地人」という語は賢治の造語であり、一般的な農民や農夫よりも適切な語であると考えたようである。農民や農夫は蔑称のきらいがあるときとみなしていたからである。マロリ・フロム著/川端康雄訳, 前掲書, 1984年, 80ページ。
- 33) 「農民芸術概論」(『新修全集』第十五卷, 1980年, 5～7ページ)。
- 34) 「生徒諸君に寄せる」(『新修全集』第四卷, 1979年, 298～300ページ)。
- 35) 福島章『宮沢賢治—こころの軌跡』講談社学術文庫, 1985年, 163ページ。
- 36) 千葉恭「羅須地人協会時代の賢治」(『イーハトーヴォ』, 第2期2号, 1954年, 27～8ページ)。
- 37) 名須川益男「宮沢賢治とその時代」(『岩手史学研究』, 35号, 1963年, 56ページ)。
- 38) 「[もうはたらくな]」(『新修全集』第四卷, 1979年, 132～4ページ)。
- 39) 中村稔『定本 宮沢賢治(増補版)』芳賀選書, 1966年, 42～4ページ。
- 40) 拙著『近代日本の農業政策論—地域の自立を唱えた先人たち』昭和堂, 2012年, 69～73ページ。
- 41) 伊藤信吉『ユートピア紀行』講談社, 1973年, 159ページ。
- 42) 岩手県農会の方針は自給肥料の増加であった。三浦黎明『岩手県の勸業政策と農会—日本の近代化と東北開発のはざままで』刀水書房, 1998年, 226～30ページ。
- 43) 持田恵三, 前掲書, 1997年, 209ページ。
- 44) 「[あすこの田はねえ]」(『新修全集』第四卷, 1979年, 120ページ)。
- 45) 「塩水撰・浸種」(『新修全集』第三卷, 1979年, 28～30ページ)。
- 46) 真壁仁「農業者としての宮沢さん(私の研究メモの一)」(『宮沢賢治研究(1)』, 1935年(復刻版), 19ページ)。
- 47) 堀尾青史『年譜 宮沢賢治伝』図書新聞社, 1966年, 218ページ。
- 48) このアレニウスは、溶液化学などの分野で著名なスバンテ・アレニウス(Svante August Arrhenius, 1859–1927)ではなく、その甥にあたるオーロフ・アレニウスである。ト蔵建治「冷害と宮沢賢治—「グスコーブドリの伝記」の背景」(『農業気象』, 第47卷1号, 1991年, 35～41ページ)。
- 49) 大島丈志, 前掲書, 2013年, 225～31ページ。
- 50) 「グスコーブドリの伝記」(『新修全集』第十三卷, 1980年, 263～307ページ)。
- 51) 「境内」(『新修全集』第五卷, 1979年, 308～9ページ)。
- 52) マロリ・フロム著/川端康雄訳, 前掲書, 1984年, 85ページ。
- 53) 「農民芸術概論綱要」(『新修全集』第十五卷, 1980年, 8～17ページ); 北川透「『農民芸術概論』をめぐって」(『新修全集』別巻, 1980年, 271～85ページ)。
- 54) 宮沢賢治「講演筆記帖」(『新校本 宮澤賢治全集』第16卷・上(補遺・資料)補遺・資料篇, 筑摩書房, 1999年, 195～6ページ)。
- 55) 「ポラーノの広場」(『新修全集』第十二卷, 1980年, 3～90ページ)。

- 56) 中村稔『定本 宮沢賢治 (増補版)』芳賀選書, 1966年, 30ページ。
- 57) 「地主」(『新修全集』第五卷, 1979年, 92～5ページ)。
- 58) 拙稿「二宮尊徳思想の現代的意義—幕末期の農村復興に学ぶ」(並松信久・王秀文・三浦忠司『現代に生きる日本の農業思想』ミネルヴァ書房, 2016年, 75～147ページ)。
- 59) 松田基次郎『土に叫ぶ』泰流社, 1978年, 3ページ。
- 60) 川原仁左エ門「民主主義思想」(川原仁左エ門編著, 前掲書, 1973年, 293ページ)。
- 61) これは柳田国男(1875–1962)が描いた「中農」養成策に通ずる。柳田国男「中農養成策」(柳田国男『定本柳田国男集』第31巻, 筑摩書房, 1970年, 413～5ページ); 拙著, 前掲書, 2012年, 73～8ページ。
- 62) 川原仁左エ門「農業技師」(川原仁左エ門編著, 前掲書, 1973年, 280ページ)。
- 63) チューリップについては, 1923(大正12)年頃に執筆されたと推定される「チューリップの幻術」という未発表作品がある。賢治は早い時期からチューリップをはじめ花卉園芸に関心をもっていたようである。大島丈志, 前掲書, 2013年, 22～6ページ。
- 64) 川原仁左エ門「農業技師」(川原仁左エ門編著, 前掲書, 1973年, 280ページ)。
- 65) 『新校本 宮沢賢治全集』第十六巻・下(補遺・資料)年譜篇, 筑摩書房, 2001年, 315ページ。
- 66) 「産業組合青年会」(『新修全集』第三巻, 1979年, 165～7ページ)。
- 67) 棚橋初太郎『農家小組合の研究』産業図書, 1955年; 庄司俊作「農家小組合の政策と展開—農家小組合と村落」(『社会科学(同志社大学人文科学研究所)』, 第76号, 2006年, 73～106ページ)。産業組合の導入については, 拙稿「明治期における協同組合思想の変遷」(『報徳学』, 第11号, 2014年, 27～50ページ); 拙稿「明治期における信用組合構想—報徳社をめぐる提言」(『報徳学』, 第12号, 2015年, 35～48ページ)。
- 68) 見田宗介『宮沢賢治—存在の祭りの中へ』岩波書店, 1984年, 80～5ページ。
- 69) 「[こっちの顔と]」(『新修全集』第五巻, 1979年, 58～9ページ)。
- 70) 「集案案内」(『新修全集』第十五巻, 1980年, 508ページ)。
- 71) 「ボラーノの広場」(『新修全集』第十二巻, 1980年, 88ページ)。
- 72) 「副業」(『新修全集』第六巻, 1980年, 96ページ)。
- 73) 大島丈志, 前掲書, 2013年, 150ページ。
- 74) 三浦黎明『岩手県の勸業政策と農会—日本の近代化と東北開発のはざままで』刀水書房, 1998年, 250～8ページ。
- 75) 原子朗『新宮澤賢治語彙辞典』東京書籍, 1999年, 310ページ。
- 76) 「耕耘部の時計」(『新修全集』第十巻, 1979年, 287～96ページ)。
- 77) 「オツペルと象……ある牛飼ひがものがたる」(『新修全集』第十巻, 1980年, 207～18ページ)。
- 78) 川原仁左エ門「農業技師」(川原仁左エ門編著, 前掲書, 1973年, 278ページ)。
- 79) 「或る農学生の日誌」はフィクションであるが, 童話でもなく, 散文詩風でもない。農学校生徒の意識で書かれた日誌という体裁をとっている。『新修全集』第十四巻, 1980年, 119～41ページ。
- 80) 「或る農学生の日誌」(『新修全集』第十四巻, 1980年, 119～20ページ)。
- 81) 福島章『宮沢賢治—こころの軌跡』講談社学術文庫, 1985年, 166ページ。
- 82) 白藤慈秀『こぼれ話宮沢賢治』社陵書院, 1972年, 93ページ。
- 83) 中村稔『定本 宮沢賢治 (増補版)』芳賀選書, 1966年。『春と修羅』などから, 賢治は農業技師よりも自然科学者といえるのかもしれない。
- 84) 千葉恭「羅須地人協会時代の賢治」(『イーハトーヴォ』, 第2期2号, 1954年, 72ページ)。
- 85) 拙著, 前掲書, 2012年, 113～48ページ。
- 86) 川原仁左エ門「羅須地人協会」(川原仁左エ門編著, 前掲書, 1973年, 275ページ)。
- 87) この間の事情, とくに父(政次郎)と子(賢治)の関係については, 小説ではあるが, 門井慶喜『銀河鉄道の父』(講談社, 2017年, 第158回直木賞受賞作)に詳細に描写されている。ちなみに, 同年(2018年)の第158回芥川賞受賞作(若竹千佐子『おらおらでひとりいぐも』河出書房新社, 2017年)も, 題名は賢治の詩「永訣の朝」に基づく。
- 88) 「紫紺染について」(『新修全集』第十一巻, 1979年, 67～76ページ)。この作品は1921(大正

- 10) ～1925（大正14）年に書かれたと思われる。
- 89) 柳田国男『遠野物語・山の人生』岩波文庫，1976年，7ページ。
- 90) アスパラガスとレタスの日本への導入については，拙稿「明治期における津田仙の啓蒙活動—欧米農業の普及とキリスト教の役割」（『京都産業大学論集社会科学系列』，第30号，2013年，85～122ページ）。
- 91) 境忠一『評伝 宮沢賢治』楼楓社，1975年，286ページ。
- 92) 千葉恭「羅須地人協会時代の賢治」（『イーハトーヴォ』，第2期2号，1954年，27ページ）。
- 93) 「境内」（『新修全集』第五卷，1979年，308～9ページ）。
- 94) 「[土も掘るだろう]」（『新修全集』第四卷，1979年，53～4ページ）。
- 95) 「[同心町の夜あけがた]」（『新修全集』第四卷，1979年，85～6ページ）。
- 96) 「[降る雨はふるし]」（『新修全集』第五卷，1979年，72～3ページ）。
- 97) 「[倒れかかった稲のあひだで]」（『新修全集』第五卷，1979年，182ページ）。
- 98) 「会见」（『新修全集』第五卷，1979年，96～9ページ）。
- 99) 「火祭」（『新修全集』第五卷，1979年，80～2ページ）。
- 100) 千葉一幹『宮沢賢治—すべてのさいはひをかけてねがふ』ミネルヴァ書房，2014年，194～8ページ。
- 101) 「どんぐりと山猫」（『新修全集』第十三卷，1980年，7～20ページ）。
- 102) 「鹿踊りのはじまり」（『新修全集』第十三卷，1980年，121～36ページ）。
- 103) 「銀河鉄道の夜」（『新修全集』第十二卷，1980年，91～161ページ）；見田宗介『宮沢賢治—存在の祭りの中へ』岩波書店，1984年，47～50ページ。
- 104) 中村稔『宮沢賢治ふたたび』思潮社，1994年，211ページ。
- 105) 福島章，前掲書，1985年，68～70ページ。「雨ニモマケズ」がもっていた宗教性については，丹治昭義『宗教詩人 宮澤賢治—大乘仏教にもとづく世界観』中公新書，1996年，209～39ページ。
- 106) 中村稔『中村稔著作集 第2巻 詩人論』青土社，2005年，334～40ページ。
- 107) 草野心平「宮沢賢治覚書」（統橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成』第1巻，日本図書センター，1990年，176～80ページ）。
- 108) 千葉一幹『宮沢賢治—すべてのさいはひをかけてねがふ』ミネルヴァ書房，2014年，271～2ページ。
- 109) 拙稿「20世紀初頭日本における報徳主義の役割」（『報徳学』，創刊号，2004年，32～44ページ）。
- 110) 飯田泰三『批判精神の航跡—近代日本精神史の一稜線』筑摩書房，1997年，205ページ。
- 111) 評論家の吉本隆明（1924-2012）によれば，賢治の物語の源泉となっている感情は，弱いものの性格悲劇と，自然のなかの生物の生命維持にまつわる秩序と階層とが，からみあった場所にあるという。吉本隆明『宮沢賢治』ちくま学芸文庫，1996年，204～8ページ。

# The Science and Rural Activities of Kenji Miyazawa

— The Conflict of Intellectuals over Agriculture —

Nobuhisa NAMIMATSU

## Abstract

Kenji Miyazawa (1896–1933) performed creative activities based on rural activities and faith, and left behind many poems and fairytales. Many existing studies on Kenji Miyazawa have mainly discussed his works in terms of art and religion. Also, because of Miyazawa's background and activities, some have also focused on agricultural practice and rural activities. Many intellectuals were interested in agriculture in modern Japan, but Miyazawa was the only intellectual who engaged in the tertiary study of agriculture, and practiced it too. In the existing research, the relationship between Kenji's works and agriculture has not been sufficiently elucidated.

This paper examines how Miyazawa evoked agriculture and rural villages in his works. His works are characterized by the use of many terms from natural science. In addition, he did not write any novels in which humans were the leading characters. Many of his stories are about nature, and the humans in those stories are drawn in the guise of flora and fauna. In this respect, agriculture is strongly reflected in his works. Based on an interpretation of a passage from the famous poem "Be not defeated by the rain" (*Ame nimo makezu*), this paper considers, in order, the "effectiveness of agriculture", the "rural village problem and its countermeasures", and finally, the "feeling of alienation in rural society".

Miyazawa's rural activities had little success, and because of this, his distress and frustrations were great. But this provided the driving force that pushed him towards creation and faith. In other words, the conflict between modernity, represented by science and technology, and tradition, represented by kinship and ties to land, became the driving force behind his creative work.

**Keywords:** Kenji Miyazawa, Agriculture, Agricultural Science, Rural Society, Fairy Tales